

403 Forbidden

装甲步兵

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

数ある極秘作戦、その顛末をここに記す。

# 目次

人物一覽	1
死出の旅路	7
砂上の遺物	10
帰還	14
修理と補給	18
再調整	18
調整と改造	24
進展	29
成果	29
平穩	29
再誕	29
情報	35
回収	35
更新	35
試験	39
狩獵	39
人形	45
追憶	45
1 (注意)	45
低体	45
温症に関する微妙なネタバレを含んでお ります。	45

人形	追憶	2
人形	追憶	3
人形	追憶	4
人形	追憶	5
鹵獲	侵食	71
帰投	帰投	71
過去	受け入れ	76
顛末	1	79
ある一日		83
F05		86
作戦終了		89
新型戦術人形		94
テスト		94
救出作戦	前段階	100

救出作戰 成功



103

# 人物一覽

Super Sassy

本編主人公になる人形、低体温症作戦終盤にアヴァロン城塞司令官にして人形部隊指揮官の派遣した部隊が作戦行動中に偶然発見した輸送機の残骸内より回収、I. O. P. に引き渡そうとしたが他ならぬI. O. P. よりアヴァロンへの配属と実戦データの収集を要請され、そのままアヴァロン城塞所屬となる。

アヴァロン配属後データを収集する傍ら数々の作戦で多大なる戦果を挙げ続け、最終的に司令官に請われて彼の進める計画の一つに志願した。

改造の過程に於いて、ソフト面ではダメージ制御系は完全にオミット、感情や一般常識に割かれるリソースの殆どを自律戦闘に必要な物に優先的につぎ込んだ影響で嘗ての快活さは失われ、コミュニケーション能力も低下している（全く話せない訳ではないし話しかければ返事はするのだが、常に真顔で返してくるのでウィリアム曰く反応に困るとの事）。

機体も正規軍から譲渡された最新のパーツを使っており、片手で90 kgの物体を持ち上げられる出力を誇る人工筋肉を搭載、機動力は恒常的に時速40 km、限定的ながら時

速72 kmで走る事も可能と中身は最早別物である、但し高コスト過ぎて量産性は皆無、実質ワンオフ機も同然である。

司令官、又は指揮官 35歳

アヴァロン城塞の最高司令官にして人形部隊の指揮官、アヴァロン城塞の市街地に住む市民の為の福祉活動に就職斡旋と労働環境の充実化を行う傍ら、城塞に勤務する従業員や配下の人形達からの意見や要望にも真摯に応える等、周囲からは人格者との評判もある一方で、裏ではI・O・P・やグリフィン上層部と結託して新型人形の開発、運用等といった数々の計画を遂行しており、他にも反I・O・P・グリフィンを掲げる過激派団体や横槍を入れてきたライバル傭兵会社の悉くを壊滅に追いやり、これらに関与していた者達も子供だろうと容赦無く抹殺し尽くしてもいる。

ウイリアム アッカーソン 27歳

アヴァロン要塞のヘリ部隊に所属するパイロット、以前は民間の航空郵便局に勤めていたがある日鉄血宛の荷物を配達した際に鉄血の工場で警備に就いていた下級人形（恐らくヴェスピドだと思われる）に一目惚れし、彼女達を常に間近に見たいが為に鉄血へパイロットとしての腕を売り込んで転職を画策、見事に玉砕した。

友人達にその事で愚痴っていたところ、友人の一人に俺が勤めてるグリフィンならパイロットには危険手当込み報酬割高で待遇も良いし、一応鉄血とも関わり（当時グリフィンとの関わりを持つI. O. P. が鉄血に事業の一部を委託していた）あるから稀に鉄血の人形をへりに乗せて運ぶミッションもあるぞ　と言う言葉に釣られて即日転職、しかしアヴァロン城塞配属直後に蝶事件が発生して鉄血工造が壊滅し、同社の戦術人形が制御不能に陥ってしまう。

しばらく消沈していたが、グリフィンが対鉄血作戦に本格的に参入する事になったと聞くやグリフィンとの戦闘で破壊された鉄血人形を回収して修理し、それぞれに合った電脳を搭載して自分の物にする事を思い付いて実行、当初は配属先の整備士達と共に行っていたが最終的に自分一人で修理できるだけの腕前を身につけ、以降は基本的に一人で修理している。

その後何処からか嗅ぎつけた正規軍から、修理して保管しているコレクションの予備機と稼働データを言い値での購入を打診され、夢中になって集めまくって倉庫に収まり切らなくなる程の数に膨れ上がった予備機の置き場に困っていた彼もこれ幸いと格安で売却、以降定期的に正規軍へ売却して得た資金でもって世話になっている基地の職員や人形達に嗜好品を中心とした贈り物を渡している。

主任 氏名不明 年齢不明

Super Sassaの改造とメンテナンスを行っている研究員、元々は戦災孤児で物心ついた時には孤児院にいた。

自らの境遇に嘆く事なく勉学に励み、遂にはI. O. P. に就職するに至ったがI. O. P. お抱えの天才研究員にしてAR小隊の生みの親であるペルシカリアという存在と出会い、彼女に一目惚れをすると同時に超えるべき目標と捉え研究に打ち込む。

その後アヴァロン城塞司令官に引き抜かれ、志を同じくする同期を得て司令官の後ろ盾の下様々な研究開発に挑んでいる。

いつか彼女を超える成果を打ち立て、その上で彼女にプロポーズするという野望を胸に。

Super Sassaに関しては彼女を自らの野望の踏み台にするつもりは毛頭なく、むしろ自身の成果全てを捧げてでも彼女のみで計画完遂を目指しているのだが、同期の研究員達や司令官を除く他の同志達には普段の態度からSuper Sassaを踏み台としか見ておらず、有望な別の人形でも出ればそっちを使って計画を完成させるのでは?と思われる。

MIガーランド



アヴァロンで製造された戦術人形、指揮官に見出されI・O・P.とグリフィンの障害となる存在を抹殺する任務を請け負っているが、普段は城塞防衛部隊の隊長として活動している。

後に新しく製造された自身の後輩にして部下であるBM59からの熱烈なアプローチを受けて交際をスタート、同棲生活を送っている。

指揮官から要請される特務の関係上あまり時間を取れない事やBM59には秘密にしなければならぬ事が多々ある現状に心苦しく思っている。

## I t B M 5 9

M1ガーランド同様アヴァロンにて製造された戦術人形、訓練生時代に自身の教官としてやってきたガーランドによって見出され、鍛えられた。

公私共に親身になって自身に接してくれる彼女を純粋に慕い徐々に惹かれていき、やがて抑えきれなくなった心中を彼女に告げ交際を申し入れるが断られてしまう。

実際自身は未だ訓練課程すら終えてない新米で、彼女は自身の教官にして城塞防衛の任を預かるエリート部隊の隊長、釣り合わないどころの話ではない。

それでも諦めきれなかった彼女は迷惑にならない程度にアプローチを続けつつ訓練に励み極めて優秀な成績でもって訓練課程を修了、実戦配備に於いてガーランドの部隊

ではなく別の部隊への配置を希望、てつきりガーランドと同じ部隊への配属を熱望するものと思つていた同僚達は首を傾げた、彼女自身はそれを尻目に部隊配属後、ガーランドの手法を取り入れつつ自分なりのアレンジを加えて部隊員達と公私にわたつて積極的に交流して連携を深め、実戦では司令官からの指示を守りつつも自分なりに堅実な戦術でもつて着実に戦果を挙げて頭角を現していった。

司令官もそんな彼女に注目し、当時考案していた更なる特殊部隊増員への組み込みを見越してB M 5 9を部隊ごとガーランド隷下の部隊へと配置とした。

漸くガーランドに追いついた事を確信した彼女は、再会したガーランドに着任式修了後に再度彼女の執務室へと赴き胸を張つて交際を申し入れ、遂にガーランドに受け入れられるのだった。

とはいえガーランドは司令官から特殊任務を仰せつかつて出撃していた為にあまりに一緒に過ごせる時間は取れず、B M 5 9も何となく彼女が自身に対して話す事は出来ない何かをしている事を時折見せる憂いを帯びた表情から察していたが敢えて聞かず、寧ろ自分の元へ帰つてきた彼女が少しでも心休める様にと、労わり支えていこうと誓つている。

## 死出の旅路

荒涼たる大地だけが続く世界、その空を轟音とともに突き進む一機の軍用ヘリの中でその人形は己が半身たる愛 Super SASS 銃を抱えてゆったりとシートにもたれかかりこれから始まる作戦に備えていた。

いつも通りに装備を整え自らの指揮官より与えられる命令をこなすだけの機械であれと、自らの感情モジュールに割り振られているリソースをカットし、戦闘のみに必要なシステムへ入力と最適化を行う。

〔作戦開始地点まで5分！〕

キャビン内は締め切っているとはいえヘリ自体が立てるローターの騒音は存外凄まじい、それに負けぬ大声でヘリの機長はお客さん（グリフィンの基準で言えば戦術人形は乗客ではなく積荷になるが）に到着時間を伝えてきた。

お客さんもとい戦術人形 Super SASS はセーフティを掛けたままの半身に徹甲弾のたつぷりつまったマガジンを叩き込むのを返事として応えた。

ヘリが着陸地点上空に到達するや Super SASS はスライドドアを開き、周囲

へと視線を走らせる、ヘリ両側面に取り付けられているミニガンを操る機銃手2人も同様に両腕を緩く構えつつも周囲を見やるその視線は鋭い。

「ランディングポイントはクリア！」

ガンナーからの報告を聞いた機長は「了解、降下する！」と答え着陸地点上空を中心に緩く旋回させていたヘリを静止させ降下を開始、高度3mでホバリングさせる

機体が静止したのを確認したSuper SASSは機長へ視線を向け機長からの合図を確認、愛銃のセーフティを解除するや機外へと飛び出した

グリフィン某区作戦司令部

「Super SASSの降下を確認、murder birdは当該空域より離脱します」

オペレーターの報告を聞き、メインモニターに映し出されている<sup>murder</sup>光<sup>bird</sup>点が高度を上げ戦域を離れていくのを視界に収め、しかしすぐに作戦区画に残っているもう一つの光点、Super SASSに視線を戻した男 Super SASSの指揮官はただ自らの体を預けている椅子に深々と腰掛け組んでいた足を組み替え、首に掛けている小型マイクの送信スイッチに触れ一言「始めろ」と言葉を発しただけであった

もしここに人形を扱う事に詳しい他の指揮官がいたならば、目の前で呑気に椅子に

座ってただ始めるとだけ命令してから何も言わずメインモニターを見ているだけの男の正気を疑うか人形の扱い方も碌に知らない凡愚と嘲っているだろう、今行われているのは<<通常作戦>>であって自律作戦などではない、戦術人形は通常作戦で運用される場合は指揮官から指示、攻撃位置の指定やタイミング等を細かくとまではいけないまでもある程度受ける必要がある、でなければ人形側はその場での自衛戦闘しか行わないし指揮官とのネットワークが切れた場合最悪待機状態への移行すらありえるのだが  
 ここであり得ないことが起こる

Super SASS

〔始めろ〕

その一言でSuper SASSという戦術人形は最適化を終わっていた戦闘システムを本格的に稼働させ、着陸地点から駆け出した、向かう先は<<自身のAIが敵が潜むのに最適な場所と判断>>した場所、2km程の地点にある廃棄された工場である

脚部関節の負荷 想定内 稼働率 極めて良好 出力増大

Super SASSは自身のステータスを確認し 特に問題が無いと結論づける  
 や更に加速、時速40キロで目標地点に向かった

## 砂上の遺物

Super SASSは工場700mで停止、目標の工場南西にある緩やかな丘の上に登ると森の如く密集した大小様々な岩場に潜り込み、工場一帯を観測する

エリアマップ起動 工場とその周辺の構造物を確認 守備及び待ち伏せに最適なエリアをマーク

網膜の内に拡げられたマップと視界に収まっている工場の誤差を細かく修正、構造物やその他の障害物にマークを割り振り振り敵戦力の予測配置図を組み上げると自ら象徴たるライフルを緩く構え、備え付けられたスコープを覗き込む 引き金にはまだ指を掛けない

工場正面50m内 クリア 南東側エリア 反応無し 北西方向 敵捕捉

北西側、工場から200m程離れた平地を小さな四肢を使って歩く箱型の胴体に背負式に取り付けられた機銃という特徴的な機体 第三次世界大戦時に急速に普及した戦闘用自律人形の開発 販売を行っていた企業鉄血工業製造会社の製品の一つである小型戦闘機体 通称ダイナゲート を3機スコープに捉えたSuper SASSはすぐには撃破せず その動きを観察する

対象の移動方向は北西を背に南東へ直線移動 移動先にある工場は既に鉄血の制御下となっており対象は工場から出撃し帰還途中の警備部隊である可能性を検証 工場側からの動き無し 警備部隊の可能性は限りなく低いと判断 工場を調査及び占拠する為の偵察部隊の可能性大

ダイナゲート後方70mに動きあり アサルトライフルを装備した人形ヴェスピドー体 サブマシンガンの装備 リッパード 遮蔽物に隠れつつ工場へ距離を詰めているを踏まえ 対象を偵察部隊と呼称 他の反応無し 所持武装の有効射程の長い標的<sup>ヴェスピド</sup>を優先目標に設定 攻撃開始

### 作戦司令部

指揮官がSuper SASSが工場付近の丘から平地を移動していた敵部隊に対して攻撃を開始した事は メインモニターに映されているマップの光点とつい先程現場上空に到達したドローンからもたらされる映像から既に把握していたが 特に何かする訳でもなくただ淡々と状況の推移を見守っていた 彼にとつてこの作戦は実戦テストであり 計画の一環であるのだから余程の事でも無い限りはSuper SASSに命令を送る事も無い そう彼女がどこまで<<自分で考え 判断し どの様に動かを見るテスト>>である以上十分な結果が得られるまでに自分が彼女に対してアクションを起こすという事は どうやっても結果が芳しく無い、又は彼女が撃破され

テストの続行そのもの不可能と判断された時位なものである。だからこそ彼はこの計画を立案し推進する者としてただ事の成り行きを見届けるのみに徹するのだ。少なくとも《今は》

Super SASSの持つ銃に取り付けられたサブレッサーにより減音された発砲音が発せられて間もなく、胸部中心を撃ち抜かれたヴェスピドが仰け反るように倒れる様を見届ける間もなく素早く次の標的を選定。半壊した小屋とすぐ近くに放置されていた車の残骸の影に飛び込むリッパ―2体は後回しにし被弾したヴェスピドの位置を中心に射手の位置を割り出し、馬鹿正直に此方に向かって来るダイナゲート3機に照準。流れるような動作で3連射。殆ど同時に3機が徹甲弾の直撃を受け弾け飛ぶ。

続いて遮蔽物に隠れたりリッパ―2体の丁度中間位置に照準するに留める。撃たな

い事で射手である自分が移動したと思わせ。相手を誘い出す作戦に出たのだ。Super SASS自身人形にこの手のブラフが通じるか試す程度の考えでやってみたのだが存外効果はあったようで様子を伺おうと半壊した小屋の影から顔を覗かせたりリッパ―に照準。発砲。顔を撃ち抜かれたリッパ―がもんどりうって倒れるのを確認。側に放置された車の残骸から未だに動かない最後の標的を捉える。標的が銃だけを出して発砲。射程の短いサブマシンガン。しかも狙いも碌に付けてもない盲撃ちにSuper SASSが怯む筈も無く、腕の位置から胴体の位置を割り出し発砲。7.



62ミリ徹甲弾は錆つきボロボロの軽乗用車だった物の影に潜んでいたリッパーの胴体を正確に撃ち抜いた

## 帰還

murder bird機長 ウイリアムアッカーソンは現在、仕事用のUH-60ではなくグリフィン入社前からの相棒であるMH-6、通称リトルバードで各S地区への巡回飛行という名の鉄血人形のパーツ集めに勤しんでいた。

今でこそ鉄血人形は蝶事件の影響で暴走、人類に対して牙を向いているが事件前は軍は元より一部のマニアの間ではそれなりに人気の商品だったのだ、彼もまたその筋の間であるのだが、鉄血人形の購入資金調達の為に以前勤めていた安月給の民間の航空郵便業から以前から誘いのあった危険手当込みでより高待遇のグリフィンへ移籍、ヘリコプターを用いた傭兵業を始めたのだがすぐに蝶事件が発生、結局買えずじまいに終わってしまったが何を思ったか戦闘が終わった地域に巡回飛行と称して赴き鉄血人形のパーツを集めて自分で修理し始めたのである。

「さあ、今日は何が手に入るかなつと。」

ウィリアムはヘリを着陸させ、護身用のMP5kを片手につい昨日戦闘があつた地域を見て回り、イエーガーやヴェスピド、リップパーにガードといった鉄血人形の残骸から使えるパーツを集めては鼻歌を歌いながらヘリに取り付けられているボックスに放り

込んでいく作業を繰り返していると。

「おほっ、超ラッキーブルートじゃん♪」

ブルート、鉄血人形において銃ではなく異様な切れ味を持つナイフを主兵装に凄まじいスピードで接近し敵を斬りつける戦闘スタイルの人形、それが彼の目の前で側頭部を撃ち抜かれた状態で倒れていた。

「頭部以外に損傷無し、生体部品も良好、持ち帰り決定！」

早速ブルートを抱えるとヘリの助手席に乗せナイフも嚴重に保護してボックスに放り込み機体を離陸させた直後、無線機から呼び出し音が鳴り響く。

「こちらmurder bird、感度良好どうぞー！」

思考を仕事モードに切り替え、相手からの返信を待つ。

「murder birdこちらアヴァロンコントロール、当基地司令部より現在の巡回任務を更新、Super SASSの回収に向かえとの事だ、燃料は問題無いか？」

アヴァロンコントロール、現在彼が所属する基地からの任務内容を聞くやすぐに自身の所持している端末を起動、マップについて3日ほど前に戦地に送り届けた人形Super SASSの現在位置が表示される、丁度現在位置から1kmも離れていない、燃料はまだ改造して取り付けているドロップタンク側に半分以上ある、巡回を始めて1時間も経っていないかった、ヘリの両サイドに付いてある兵員輸送時の簡易シートもガラ空き、

今日は本当についてる。

「こちらmurder bird燃料に問題無し、これより回収地点に向かう！」

ウィリアムは司令部に了承の返信を送り、Super SASSのいる回収地点に向かった。

Super SASS

工場周辺での戦闘以降、これといったトラブルも無く順調にテストをこなした彼女は現在、迎いのヘリが来るまでそう長くない時間これまでの戦闘データを整理していた。

システム チェック ケース3-5の戦闘データをファイリング 人間のテロリストとの遭遇戦時のデータを優先的に

Super SASSはつい数時間前、敵を求めて移動中不意に人間、武装したテロリストの一团との遭遇戦に陥った、その際に怯えて隠れていた1人だけくく意図的に残して>>他全員を射殺、制圧したと思って油断したふりをして襲わせある程度揉み合いを行った後にワザと組み敷かれてそこからどのように逆転するかテストをしようとしたのだが、自身を組み敷いたテロリストが揉み合いになった際にセーラー服が大きく

はだけ、半裸になったSuper SASSの姿に<<何を思った>>のか所持していたナイフを放り捨てニヤついた顔を近づけてきたではないか。

この状況でナイフを振り下ろすどころか態々放り捨てて何をしようというのか？

Super SASSはとりあえず近づいてきたテロリストの顔面、鼻に噛み付き文字通り食い千切り、吐き捨てると悲鳴を上げて顔面を押さえて仰け反ったテロリストを逆に押し倒して馬乗りになり、テロリストが捨てたナイフを拾い上げて未だに激痛に苛まれまともに動けないテロリストの額を片手で掴んで固定、顎下から一気に突き入れ、脳まで達した刀身を抉ってトドメをさしたのだった。

ヘリを確認 murder bird の識別信号受信 マーカー使用

データを一通り整理したところで回収の為のヘリを確認し自身の識別信号をヘリに送信、程なく自身の目前に着陸した鉄血人形の残骸を乗せたヘリに特に何を言うでも無くパイロット側のサイドデッキに腰掛け落下防止ベルトを装着、パイロットに合図を送るとヘリは即座に離陸、基地へ向けて飛び立った。

## 修理と補給 再調整

Super SASSを回収したへりはS05とS04の境界線にある城塞都市、通称アヴァロン上空に差し掛かっていた。

城塞はかつてこの地一帯を統治していた貴族によって建設された古城を中心に全周を市街地で囲まれ、更に強固な城壁で囲む形になっている。

建設後何度か増改築を繰り返し城塞周囲に行くつかの堡塁（大戦時に全て猛砲撃により喪失、現在はその遺構が僅かに周辺に残されている）が設けられ、3度目の世界大戦時には正規軍の拠点となるなど持ち主を転々とし、最終的にグリフィンが落札、S05—04間の境界線における交通の要衝の一つとする事で落ち着いた形になったのである。

城塞から更に視野を広げると西側に全幅3キロの広大な湖を湛え北に雪深い山岳地帯（山を挟んで反対側がS04地区、現在双方を繋ぐ巨大連絡トンネルを建設中）東と南が平原となっている。

ウイリアム アッカーソン

「murder birdよりアヴァロンコントロール、パッケージ共々基地空域に到

達、着陸許可願う。」

ウイリアムが無線で連絡してすぐ、アヴァロンコントロールから2番の着陸パッドを使えと言う指示が返され、了解と返しつつ機体をパッドに向かわせていると古城に隣接する形で並ぶ複数の着陸パッド、2番以外のパッドに巨大なヘリが鎮座しているのが見えた。

（ありやあH a l o oか、随分派手にやられてるな。）

H a l o o、かつてロシア軍が使用した大型輸送ヘリ、それが見えるだけでも数機機体各所に弾痕が刻まれた状態で着陸していた。

ひとまずそれからから視線を切り、ウイリアムは誘導員の指示に従って機体を着陸させると機体から降り、丁度ベルトを外して座席から立ち上がったお客さんことS u p e r S A S Sに向き合った。

「嬢ちゃん、随分とセクシーな格好だが大丈夫か？」

対するS u p e r S A S S、ウイリアムに視線を向け表情一つ変えず口を開いた。「テロリストと至近距離で交戦しました。」

「ああそういう、、、なんつーか災難だったな、うん。」

我ながらもうちよつと気の利いた事言えないかと、思考を巡らせていると視界の隅に白衣の集団を捉え、思わず舌打ちが漏れる。

「ウイリアム君ご苦労、Super SASSを預かるよ。」

白衣共の頭目、?せぎすの男がSuper SASSとどっこいの無表情でウイリアムに話しかける。

「そりゃあ構いませんけど、この前みたいにその場で彼女をひん剥かないでくださいよ?」

ウイリアムにとって白衣の、とりわけSuper SASSを担当している連中は苦手であった、寧ろ嫌悪していると言っても良い。

何せ彼らにとって人形、Super SASSは自分達が<<>とある天才を超える為<>の実験機としか見ておらず極め付けに初の実地試験時、不具合で撃破されかけた彼女を苦労して救出し、ヘリパッドに下ろして人形専門の医療チームに引渡そうとしていた所にワラワラと集団でやって来くるなり「損傷箇所の割り出しを!服の下も全部だ!!」だの「遠隔でのデータダウンロード失敗、背中のコネクタから直接データを吸い出しましょう」だのと抜かして彼女の服を医療チームから引ったくったハサミで強引に切り裂いてその場で上半身裸にひん剥いたのである。

その後すぐに医療チームの女性陣と警備に付いていた特務人形に袋叩きにされたのだが。

「あの時は我々も切羽詰まった状況だったからね、流星にもうしないさ。」



苦笑する白衣の頭目に内心（なあにが切羽詰まった、だこの変態ども。）と思いつつ話は終わりだと言外にヒラヒラと手を振って別れ白衣の集団について行くSuper SASSを横目に今日の収穫をヘリの側に待機させていたトラックに積み込んで行く。（そっぴいゃこないだ手に入れた軍の払い下げ、1. 5世代型の電腦があつたな、ブルートに搭載してマツチングさせれば、。。。）

こうしてmurder bird機長、ウイリアム アッカーソンの一日は過ぎて行く。

## 司令部

「指揮官、鉄拳作戦の結果が届きました。」

S05指揮官、彼は現在進行するいくつかのプロジェクトの内の一つである鉄拳作戦についての報告書を手に取る。

鉄拳作戦、鉄血支配地域で確認された大型砲仮称ジュピター、その製造施設の中で最

も重要度の高い砲身と砲弾の製造設備に対する攻撃計画を30分ほど前に実行したばかりであった。

「投入した10部隊は<<当初の想定通り>>壊滅、残存人形はmg3、それと試験No. 19913 一体のみとなります、現在2機の回収を別働隊に行なわせています。」

試験No. 19913、攻撃部隊の実質的な主力とも言える存在、昨今戦術人形を使い捨ての戦力として湯水の如く消費する事が当たり前と考える指揮官が未だに存在し、そういった指揮官に充てがう戦力として、彼女の製造元であるI. O. P. 社と共謀し極秘裏に製造されたこの人形のコンセプトはグリフィンの主力である第二世代人形を元に戦闘に不要な痛覚や感情モジュールを可能な限り削ぎ落とし（完全にオミットした場合何故か戦闘能力が著しく低下してしまうためある程度の感情、痛覚を残さねばならない）、製造時に使用されるパーツの更なる単純化を行う事でコストをダミー程では無いにしろ安く抑える事で大量に揃えられ、容易に使い捨てにできるといった要素で成り立っている。

「攻撃目標の生産設備に関してですが、砲身の生産設備はある程度の破壊に成功、砲弾の製造工場は完全に破壊されたとの事です。」

指揮官は淡々と作戦内容を伝える副官の言葉を聞きながら黙々と報告書を読み進めて行く、内心本計画の有用性はある程度においてはあると結論づけたのではあるが、副

官には I. O. P. 社に当計画は多少の有用性あれど攻撃目標如何によつては成果を得られない公算大、実地試験及び該当機種を増産を一旦保留とする事、また鉄拳作戦において残存した試験機に關しては名称を原型機にちなんで P7 としてこちらで預かる事を伝えるように指示し、別の計画の進捗状況を確認していくのであった。

## 調整と改造

Super SASS

テストを済ませ、自身の研究ラボに到着したSuper SASSは身につけていた衣服を全て脱ぎ捨て、側にいた研究員の1人に手渡すと円形の台座の上に立ち、他の研究員によって手足や背中と首にコードを接続され、最後に天井から吊り下げられていた酸素マスクを被せていった。

「主任、接続完了しました。」

主任と呼ばれ、先程ウィリアムと言葉をかわしていた？せぎすの男はSuper SASSから全員が離れたのを確認し手元の端末を操作、彼女の立つ台座の淵から円筒状のガラスがせり上がり、やがて天井まで到達し完全に密閉される。

「シリンダー密閉完了、注水開始します。」

シリンダーを囲むように配置されたパソコンを操作する研究員の1人がシリンダーへの注水を開始する旨を伝えた直後、Super SASSの足元から黄緑色の液体がせり上がり、やがてシリンダーを満たすと内部にいる彼女は丁度地面と天井の間まで

浮き上がって止まり、子宮の中にいる胎児の如く自身の体を丸めてゆつくりと眼を閉じていった。

### M1ガーランド

基地の一角、かつて古城を訪れる客人をもてなす為に使われていた部屋を改装し、人形達の宿舍となつている四階建て最上階の南側隅にある一室で戦術人形M1ガーランドは目を覚ますとベットから起き上がり、両腕を上げて身体を伸ばした。

彼女の体に掛けられていたシーツがずり落ち、シーツの下から頭となつた豊かな乳房とそれに反して引き締まつた腹部が朝日に照らされて輝く様は妖艶さよりもある種の神々しさを醸し出していた。

「いけない、寝過ぎしちゃった。」

壁に掛けられた時計が午前8時に差し掛かろうとしているのを見て驚き、慌てて立ち上がりうとしてそういえば今日は急遽非番になつたのだと思ひ出す。

すぐ側でモゾモゾと動く気配、そちらに視線を移してみると自身と同じく一糸纏わぬ姿で眠る1t BM59を扱う戦術人形、妹分であると同時に恋人でもある彼女の姿を捉え、昨夜から長時間に渡つて繰り広げられた情事を思い出して下腹部と顔が熱くなつて来たが今は朝で、部屋の外からは他の戦術人形達の賑やかな声が聞こえ、外からも基

地職員達の声や車両の行き交う音が聞こえている。

残念だけど我慢の時と自身の感情素子をフラットにしようとしつつも普段見せない It BM59の解かれベツトに広がる艶やかな長髪と安心しきった穏やかな寝顔に胸の奥が暖かくなり、口元が緩む。

「せつかくの休みですし、もうちよつとだけ寝ましょう。」

ずり落ちたシートを掛け直し最愛の女性を優しく抱きしめると瑞々しい唇に軽くキスを落とし、静かに目を閉じた。

ウイリアム アッカーソン

戦利品をトラックに乗せ、宿舎近くの倉庫へと向かっていると突如運転席側の高さ5mはある塀を飛び越えたくく何か>>が車道へと着地、トラックに並走して来るのを見たウイリアムは驚くでもなく心持ち速度を緩め、ドアの窓を全開にして並走するそれに向けて呼びかけた。

「ようドーラ、調子はどうか？」

ドーラと呼ばれたそれ、彼が苦勞して修理していた頃、競馬場で活躍していた騎手の人形が落馬事故でスクラップ送りになったと聞くや現地まで文字通り飛んで行き、人形

の所有者にケースにパンパンに詰め込まれた大金とかつて極東で究極のお願いのしかたとして使われたとされる土下座を繰り出して拝み倒し、どうにか手に入れた電脳を搭載して起動させた鉄血人形の一つであるドラグーンは自身の象徴と言える二足歩行タイプの騎乗兵器を巧みに操りつつ口元に笑みを浮かべるや口を開く。

「旦那あつ、今日はえらく早いお帰りですな!」

ウイリアムは巡回飛行がてら鉄血の近接型人形をほぼ無傷で鹵獲した事や、前の仕事で戦場に送り届けたお客さんを回収した事等運転がてら話して聞かせ、それにドラグーンが相づちを打って答えるやり取りが倉庫まで続いた。

倉庫に着いてすぐ、トラックを止めると一番の戦利品であるブルートを抱え、同じく機体から降りて他の戦利品を担いだドラグーンと共に自身のコレクションが保管されている倉庫へ足を進める。

「お帰りなさい(主人!)」

倉庫の屋根の上光学迷彩のロープに身を包んだ鉄血製狙撃型人形イエーガー(警察機構で特殊部隊が使用していた人形の電脳を搭載)が手を振っているのを歪む景色の中に辛うじて捉え、ウイリアムは手を振り返す。

「隊長、お早いお帰りですね。」

倉庫の扉の前で並び立つ大楯を持ったガード（元SPの職に就いていた人形の電脳を搭載）とヴェスピド（軍から払い下げられた旧式の電脳をアップグレードして搭載）とも軽く挨拶を交わし倉庫内へと入ると作業台にブルートを固定、嚴重に保管されたケースから工具一式と電脳の一つを取り出して側で興味深げに覗き込むドラグーンを顧客に作業に取り掛かった。



# 進展 成果 平穩 再誕

## Super SASSの研究室

「素晴らしい、稼働時間の割に各パーツの消耗具合は極めて少ない、それに戦闘データの最適化効率も以前よりスムーズになっている、。。」

Super SASSの入っている液体の満たされたシリンダーを取り囲む様に配置された計器類を操る研究員達が忙しなく作業を進めていく中、主任の独り言が研究室に広がっていく。

「人悦に浸るが如く口元を歪め、喜色を浮かべる主任は手元の端末に視線を落とし込んだまま各種情報を読み取っていたが、自身の背後から研究室の扉が開く音と共に聞き慣れた男の声に振り返った。

「調整作業の進捗はどうだ？」

振り返った先に居た男、この城塞都市の主人にして戦術人形達の指揮官に主任は自信に満ちた表情で応えた。

「戦闘データの調整は順調です、Super SASSに使用したくく最新の軍用パーツくくにも何ら問題はありません。」

その言葉に指揮官は「それは良かった。」と応え、シリンダーへと歩み寄る。

「ウイリアム君には感謝の念がたえません、彼が趣味で修理し再起動した鉄血製戦術人形の余剰機や稼働データを軍に格安で売却してくれているからこそ、軍から最新の設備やパーツが融通してもらえているのですから。」

もつとも、彼は私のことは嫌いみたいですがね。という言葉に特に反応することもなく、指揮官はシリンダーの中で胎児の様に身体を丸めて眠るSuper Sassyを見つめていた。

彼女との出会い、低体温症作戦終盤に作戦参加した各指揮官がジュピターを鹵獲せよというグリフィン司令部の命令に従い、ジュピター周辺の敵戦力の掃討に動く中、それを支援する為に送り込んだ自身の部隊が発見したI.O.P.社の輸送機の残骸、そのキャビン内に固定されていた戦術人形用の大型ケース内に保管されていた人形、Super Sassyを確保し、持ち帰った事。

グリフィンI.O.P.双方へ報告してすぐ返信が入り、彼女は少数生産された試作機であり未だ量産体制の整っていない存在である事、そのままそちらで預かって実戦データ収集して欲しいと要請された承した事。

「指揮官Super Sassy入隊します、これから宜しくね。」

挨拶に訪れた時の彼女の声と笑顔。

「指揮官、本日の業務内容をこちらに纏めました。」

副官に指名した日の事。

「作戦区域に入ります、指揮官ご命令を。」

訓練を終了し、初めて実戦部隊に編入した日の事。

「やりました指揮官、文句無しの完全勝利です！」

凄まじい勢いで成長し、多くの作戦で悉く勝利を収めた。

自身の率いる戦術人形の中でも最強の存在となったのだ。

だからこそ、指揮官は自身の計画に彼女を組み込んだのだ。

彼女こそ我が計画を実行するに相応しい存在だと、人類の未来を切り開く聖剣足り得ると。

M1ガーランド

二度寝から目を覚ましたガーランドは、目を覚ましたBM59と朝の口付けを交わした後、2人でシャワーを済ませて私服を身につけると、BM59を連れて少し遅い朝食を取るために共同食堂に向かっていた。

「ガーランド先輩、今日はいいい天気ですし朝食の後は散歩なんてどうでしょう？」

BM59のそんな言葉にガーランドは笑顔で頷いた。

「それは良いですね、序でに市街地でお買い物なんてどうでしょう？」

ガーランドの提案にやった♪と小さくガッツポーズするBM59の可愛らしい姿に薄く微笑み、途中すれ違う職員や同僚の戦術人形と挨拶を交わしながら食堂へとたどり着いた。

「窓際の席で頂きましょうか。」

ガーランドの言葉にBM59は頷き、トレイを二つ取って一つをガーランドに手渡すと大広間と呼ぶに相応しい食堂、その中央に設置された大きなテーブルに並べられた様々な料理と共に用意された備え付けの皿を取りトレイに乗せ、前菜をトングで掴んだ。

ウイリアム アツカーソン 所有の倉庫内

システムが起動し、流れ込んでくるデータが自らのあり方を構築していく。

今日は何日で、自分がどうい存在かであったり。

自分の新しい身体の構成と動作方法。

これから所属する組織に現在地や罰則事項、誰が敵で誰が味方か。そして自らが従うべき存在。

「よし、成功だな。」

最初に聴覚センサーが捉えた声は、ワタシの新しい主人の声。

視覚センサーが起動、映り込んだのはワタシを覗き込む二つの顔。

「起きたつすね旦那。」

鉄血製人形ドラグーンの身体を与えられた、わたしの新しい同僚の一体。

「だな、いやあ我ながら良い仕上がりだよホント。」

嬉しそうに笑う、わたしの主人。

私の



# 情報 回収 更新

鉄拳作戦区域近辺 作戦終了から1時間32分

ゲパードM1

鉄拳作戦終了の報せから30分足らずで回収部隊が目標を追撃する鉄血の部隊と交戦状態に突入、追撃部隊を蹴散らす事自体20分も掛からないだろうが目的はあくまで回収である。

I. O. P. 本社で試作品の受領を終えて帰還の途についていた自身に送られて来た残存戦力の回収要請に やっぱ来た。と思わず口から漏れ出した声と白い吐息はしかし自らの乗り込むへり<<UH-60>>のローターから叩き出される爆音に掻き消され、吐かれた白い息はたつた今自身が開けたハッチの外へ、そして瞬く間に機体後部へと流れていった。

傍から見たら降って湧いた厄介ごとに巻き込まれたよと言わんばかりに心底大義そうにしている様に見えるがしかし、彼女自身や彼女の主人とその同志達には既定路線であり、初めからそうなる様に仕組まれていたのだから大義いも何も無いのだが。

機体の床に腰掛け、落下防止のフックを腰のベルトに装着して眼下一面に広がる森林

地帯を眺める、どんよりとした曇り空に雪を少々被った木々ばかりの世界はしかし五分もしないうちに途切れ、雪の白と土の茶色に僅かに生える雑草の緑色が混じり合う平原が現れる。

平原上空に入って10分程で眼下に二つの黒い人影を捉えた。

「目標発見！」

頭に着けたヘッドホン型の無線機からのパイロットの声が聞こえるや即座に下がりはじめる高度にゲパードは内心溜息の出る思いだった、目標周囲に隠れる場所が無いとはいえ碌に確認もせずいきなり降下してどうする。と文句の一つでも言つてやろうかと思つたがやめた、副機長が機長の頭に軽くチョップを入れつつ注意していたのもあるが目標周囲は視界に入った瞬間から自身と、両サイドのドアガンのガンナーが周囲に目を光らせているからだ。

目標周囲は所々雪が積もつているとはいえ精々1〜3cm、雪を被つて潜むには無理がある上に地面に至つては戦車の装甲板並みに硬い永久凍土で、掘つて隠れる等まず不可能だろう。

ヘリの高度が1m? になろうかというところでフックを腰のベルトから外して飛び降り、手にしていた自身の象徴ゲパードM1ラッセルをスリングを手繰つて背に回し、今回の回収目標であるmg3とその腕に大事そうに抱えられた壊れかけの試作機1機に歩み寄つた。



ウイリアム アツカーソン      ゲパードが目標と接触して5分程

起動した新しい仲間、ブルートの情報をサーバーに登録しドラグリーンとブルートにさあこれからどうしようかとあれこれ意見を言い合っていたのだが自身の端末から響いた着信音で2人に    ちよつと失礼。と断りを入れて離れ、端末を開き内容を確認する。

「ええ、。。。」

なんじゃそりや、と言いたげな声に興味を持ったブルートとドラグリーンはウイリアムの両側から勝手に端末を覗き込んだ。

ウイリアム    アツカーソン    ブルート両名は至急司令室へ向かわれたし。

「こりや珍しい、アタシらの時にはこんな事無かつたつすよね？」

「確かになつてコラ、勝手に見るんじやあないっ！」

ドラグリーンからの言葉に頷いて直ぐにハツとなり、両側から覗き込む2体を叱りつけるとドラグリーンは    イヤイヤモーシワケナイ。    と欠片も反省の態度も見せず、むしろ戯けつつパツと離れ、逆にブルートは申し訳なきようにシユンと項垂れる。

「あー、とりあえずドーラは好きにしてくれ、じゃあ行こうか<<<ブルー>>>。」

ウイリアムの言葉と差し出された手にブルートはキョトンと小首を傾げ、それが自身

の名前である事に気づくや上機嫌になり。

「はいっ、マスター！」

しおらしく項垂れていたのは何処へやら、ウィリアムの手を取って2人トコトコと倉庫から出ていくのを見送ったドラグーンはやれやれと肩を竦めて一言こぼした。

「旦那あ、、もうちよつといい名前はなかったんすかねえ。」

## 試験 狩猟

M1 ガーランド

B M 59 と朝食を済ませ、城塞正面の大通りに繰り出して早々に2人は露店を見て回っていた。

「いつ見ても凄い光景ですね。」

B M 59 のそんな言葉にガーランドも頷いて応え、周囲を見回す。

市街地の道路や建築物はヴィクトリア朝様式の古風な街並みで出来ているが、所々に空中投影式の映像が浮かび、今日の天気や最近の出来事が流れていたり。

ガス灯を模した電灯が通りに沿って等間隔に並び、最新式の電気自動車が走っている、新旧入り乱れる独特の景観を見る事ができた。

「それに人の数が多いですし、はぐれないよう気をつけましょう。」

ガーランドがB M 59 の手を取り通り沿いの雑貨店に入り、各々目当ての商品を籠に入れていく。

「先輩、あれ。」

B M 59 の指差した先S O 5 地区の戦闘に関するニュースが流れており、くくグリ

フィン本社の最精鋭部隊>>が鉄血の大型砲製造工場に対して攻撃、これに損害を与えたものの、部隊にも損害が出た為最寄りの基地にヘリや人形の修理と補給に立ち寄っているという内容が流れていた。

「これは、。」

ニュース内容は本社の人形部隊とあるが、実際にはこのアヴァロンでI・O・Pと共に秘密裏に製造された使い捨て前提の簡易量産型戦術人形による高価値目標への攻撃を行った場合の損害を計測する為の実戦テストであった、ただ作戦の規模からどうしても外部に漏れる事は避けられない、このご時世にもかかわらず未だに煩いマスメディアや人形保護団体、表向き鉄血人形の駆除から手を引きつつも密かにグリフィンの、ひいてはI・O・Pに圧力をかける為の材料を欲し、あわよくばこの<<事業>>に食い込んで利益を得んとする他の傭兵会社共は少なくない、故に秘匿するのではなく大々的に流す事で彼等にとってなんら価値の無い、いつもの対鉄血攻撃作戦の一つに仕立て上げたのだ。

「本社の精鋭部隊をもってしても損害を被るなんて、敵は相当な戦力を注ぎ込んでいたのでしょうか。」

ガーランドはBM59にそう言いつつも内心では彼女に対して申し訳なく思っていた、この作戦が主人と同志達によって実行された計画の一つだという事は知っていたの

だが、その事は限られた者にしか知る事はできない。

ガーランドは主人に選ばれた者の1人でこの作戦に関する情報は得ているがダミー人形の調整のため、参加は見送りとなっていた。

BM59はまだ選ばれていない、本当の事は話せないのだ。

今までだつてこういう事は何度かあった、表沙汰にできないミッションの為に彼女に何も告げられずに何日も基地を離れる事も、時には撃破されかけた事もあったが彼女は何も聞かず、笑顔で私を迎えてくれた。

有難い事ではあったが、それでも愛する者に嘘を吐くのは心苦しかった。

でもそう遠くないうちに彼女は選ばれるだろう、それだけの素質をBM59は持っている。

その時は彼女に今まで隠していた事を全て話そう。

そう誓いながらガーランドは彼女の言葉に耳を傾けた。

「施設の防衛部隊でしょうから最低でも大隊、最悪連隊規模ですかね？」  
「<sup>デ</sup>買物にしてはなんとも物騒な会話をしながら、会計を済ませた2人は寄り添って次の店に向かった。」

「Super Sassy、新しい任務だ。」

調整を済ませ液体の排出されたシリンドーから出た彼女は、研究員から渡されたタオルで濡れた体を拭き取っていたのだが、主任からの言葉に一旦拭くのを止めて主任に視線を向けた。

「ゲパードM1がパッケージからの情報提供で敵にハイエンドモデルがいるという報告があつた、足止めを行なっている部隊からも同様の報告があつた、目標と遭遇し交戦して撃退したそうさ。」

そう言つて主任が差し出してきた端末を受け取り端末と自身を接続させた。

端末内に保存されたフォルダの一つをポップ、即座にSuper Sassyの網膜に映し出される映像には、掃討されていく鉄血の下級人形達を尻目に大型のボウガンを引きずつて森の奥へと逃げていく全身傷だらけのハイエンドモデルが映し出されていた。

「ハイエンドモデルを手に入れるまたとない機会だ Super Sassy コレとその装備を持ち帰るのだ、サポートにmurder barrierと彼が鹵獲した鉄血のブルートをつける、現地で目標を追跡中のゲパードM1と合流したまえ。」

Super Sassyは端末との接続を解除し、主任にそれを返すと返事もそこそこ素早く身体に着いた液体を拭き取り新しく用意された衣服を身につけていった。

M G 3 ゲパードM1と合流する直前

「もうすぐ回収のヘリが来る、大丈夫だからな。」

そう言つてM G 3は自身の腕の中に抱えた簡易量産型戦術人形、指揮官から預かつた自らの教え子達、その最後の生き残りに語りかけていた。

きつと助かる、迎えは必ず来ると。

「つ、、、つー、、、。」

腕の中にいる教え子が口を開けて言葉を発そうとしていたが、彼女自身損傷が酷く言葉にならない弱々しい呼吸音があるだけであつた。

「無理に話さなくていい、大丈夫だから。」

教え子の頭を撫でながらM G 3は、遠くから微かに聞こえてくる銃撃音が、少しずつ遠のいていくのを感じていた。

それから程なくして遠くから聞こえてきたヘリのローター音に視線を向けた先、森林地帯を抜けてこちらへ向かつてくるUH-60を見つけ安堵の溜息が漏れた。

「大丈夫？」

こちらを見つけたUH-60が自身から少し離れた位置に降下、着陸する直前に飛び降りてこちらにやって来たライフル型の戦術人形、ゲパードM1にそう問われ、MG3は彼女に口を開いた。



# 人形 追憶 1 (注意 低体温症に関する微

妙なネタバレを含んでおります。

## ゲパードM1

MG3と試作人形をへりに収容後(MG3は同行を希望したが、そんな状態では無理だと半ば強引にへりに押し込んだ)、へりには乗らず未だ抵抗を続ける敵ハイエンドモデル鹵獲の為に最終目撃地点を指して進んでいた。

そんな彼女の現在の心境を表すならば、ハイエンドモデルに挑む事への緊張や恐怖など微塵も無い、寧ろ喜びに満たされていた。

そう、ゲパードM1は心の底から喜んでいたので、同志達や主人は試作された使い捨て前提の人形を用いた鉄血の重要施設に対する攻勢作戦を行った場合のデータを収集する傍ら敵側が投入してくる可能性があるハイエンドモデルを可能ならば残存戦力と回収部隊で釣り出し、自身がI. O. P. より受領した試作品を持ってそれと交戦、試作品を使用して目標を無力化するこの計画。

とはいえるかどうかも分からない、来たところで釣り出せる確証も無し、そもそも攻撃部隊の生存率も絶望視されていた作戦である(よしんば生き残ってもMG3くらい

なものだろうと思われていた)、周囲はあくまで副次的な計画として考えていたのだがそれをゲパードは利用した。

キツカケは数日前単独での反グリフィン組織の幹部暗殺任務、娼婦になりすまして誘惑しホテルに誘い込んで口に仕込んでいた胃液にのみ反応して即座に溶ける筋弛緩剤を口付けしてきた際に飲ませて無力化、大量の酒を飲ませ風呂に沈めて殺害後の帰り道でのこと。

休憩がてら立ち寄った廃都市で偶然遭遇したハイエンドモデル、デストロイヤーを見た瞬間に湧き上がってきた自分のモノにしたい衝動を抑え切れず余っていた筋弛緩剤を飲ませくく捕獲した>>(何やら通信相手と酷く言い争っていて隙だらけだった)。

何故か自壊どころか自爆すらしないのをいい事にその場で所持していたハツキングツールを使って機体の制御権を全て奪い無力化、同志達や主人にも報告せずにセーフハウスの一つに運び込み尚も抵抗する彼女に何とか自分の気持ちを伝えてモノにするべく全身傷だらけの身体を治療しつつ並行して互いの電脳を首の端子からケーブルで繋ぎ、自身の想いを伝えていたのだが、加減を間違えてデストロイヤーの自我を壊してしまふ。

幸い完全に破壊されずに済んだものの、意識を失う直前に漏らしたゲーガーという名前前から彼女に家族又は友人か恋人の類がいるのを悟り、調べたところそれが彼女と同じ

鉄血人形と知るやどうにかしてゲーガーも手に入れたと考え、この鉄拳作戦の副次的な計画を聞くや即座にこれを利用して誘い出す事を思いついたのだった。

そして彼女は自身の誘いに乗って来たのだ。

ちやんと招待状に応じて来てくれてありがとう。

諦めずに抵抗していてくれてありがとう。

その調子で頑張つて逃げ続けてね。

今、君に逢いに行くから。

『目標は依然として健在当方残弾僅少により一旦追撃を中断、目標の包囲内への封じ込めに注力します。』

回収任務から敵追撃部隊の足止め、更に掃討戦へと移行していた別部隊がハイエンドモデルとの戦闘に関する経過を無線で伝えて来る。

ライフルは背にしたままサイドアームMajorガバメントを引き抜き、ウエストポーチに仕舞つてある試

作品、無針型注射器の感触を確かめる様に触れ、ゲーガーの元へと走る彼女の顔はまるでこれから愛しい恋人との待ち合わせ場所へ急ぐ乙女表情をしていた。

ゲーガー

「くそつ、こんな奴らに拘っている暇なんかないというのに、、、いったい何処にいるんだ

!

彼女は雪深い森の中、グリフィンの人形部隊に追い詰められつつありながらも、諦める事無く応戦し何とか現状の打破を試みていた。

どう足掻いても詰みな状況、従来のハイエンドモデルならとつづくに自爆し、新しい機体に自身を移し替えているだろうにも関わらず戦い続けるのはそれすら考えられない程彼女は内から湧く焦燥に駆られていたからだ。

数日前にゲージャー宛に送られて来た差出人不明の映像付きの電子メール、記されていた数字は位置座標、鉄血の新型砲製造工場の一つであった。

更に添付されていた映像、最初は椅子に座らされている少女のぼんやりとした姿が映っているのみだったそれが、次第にハッキリするにつれてゲージャーの表情から血の気が失われて行った。

映っていたそれ、白いワンピースとくくかつてゲージャーが自作してプレゼントした> ネットクレスを身につけたテストロイヤールの姿だった。

彼女との関わりは先代の自身と上官であるアーキテクトが仕出かした失態に端を發する。

新型砲のテスト運用をしていた際、偶然にもAR小隊を乗せた輸送機を撃墜、期せずして鉄血テリトリー内に憎きグリフィンのエリート小隊を叩き落として孤立化させる

という状況を作り出して以降発生した一連の戦闘。

こちらは複数の新型砲に多数の防衛部隊、負ける要素など皆無であった。にも関わらずA R小隊には逃げ回られた上に多くの新型砲を破壊され、拳句グリフィンに救援要請の通信を発信された事で大規模な救出部隊に介入される始末。

戦力差を埋められた事で事態は大規模戦闘へと発展、乱戦の様相を呈しつつあった状況はしかしグリフィンの一部部隊によって行われた発電施設への破壊工作でもって加度的に悪化、遂にはA R小隊を取り逃がし電源を破壊された事で無力化された新型砲は敵の手に落ちていった。

アーキテクトは鹵獲され先代ゲーガーもエージェントからの撤退命令を無視してアーキテクト救出のため残存部隊を纏め上げ、彼女のいる司令部に突撃したのを最期に行方不明となった。

未曾有の大失態、そして何より下級人形の無線記録を中心とした解析調査の結果が後にバックアップとして起動させられた今代のゲーガーに対する周囲からの風当たりを強くする事になる。

内容は様々であったが、特に注目されたのはアーキテクトと合流したゲーガーがなんらかの遣り取りをした後突如グリフィンの人形と共に自分達に攻撃してきたという内容だった。

既にアーキテクトに関して以前からの言動とその思考パターンからいずれ鉄血から離反する危険性が指摘されていたのだが(後の調査でグリフィンに積極的に協力している事が判明している)、今回の一件はそれを決定的なものとした事でバックアップは凍結される事が決定された。

ゲージャーに対しても同様の措置を取るべきとの動きもあつたが、問題の通信にしても混乱の最中の遣り取りで決定的な証拠とはなり得ず、普段の鉄血に対する姿勢から問題無しとされたが、念の為新型砲テスト前のメモリーからのバックアップの起動となつたのであつた。

とはいえそれで周囲が納得する筈もなく、一部のハイエンドモデルからは公然と罵倒され、自身に付けられた下級人形は彼女の護衛というより監視の意味合いが強かつた。

先代の失態と裏切りの疑惑、周囲からの疎外感に徐々にすり減つていく彼女。そんな中気さくに話しかけてきたのがデストロイヤーだつた。

## 人形 追憶 2

ゲーガー

「ゲーガーじゃん、どしたのこんな所で？」

背後からの声に、ゲーガーは旧鉄血本社ビルの屋上で手摺にもたれながら夕焼けを眺めるのを止め振り返った。

「お前は、。」

振り返った先に居た人形、デストロイヤーが屋上入り口から此方に歩いて来るのを見たゲーガーはしかしすぐに視線を夕焼けへと戻した。

「ちよつと、私が話しかけてるのになんで目を逸らすかなあ？」

そう言つて自身の隣まで来て同じく手摺にもたれ掛かるデストロイヤーにゲーガーは言葉を投げかけた。

「何の用だ、他の奴らみたいに私を馬鹿にでもしに来たか？」

そんな言葉にデストロイヤーは一瞬ムツとなりつつも、ゲーガーの憔悴した表情を見て怒鳴るのではなく静かに答えた。

「そんなんじゃないわよ、ただここに來たら面白いモノが見れるってドリーマーが言う

から来てみただけよ。」

そう言つてデストロイヤーはゲーガーから視線を切るとゲーガーに続けて言葉を発した。

「そしたらアンタが居ただけの事、まったくもうドリーマーの奴面白いモノなんて何処にもないじゃないのよ。」

ドリーマー　かつてゲーガーが超えんとした存在。

あの生意気な戦略家気取りの鼻を明かし自らの優位性を証明せんとしていた先代の自身は、降つて湧いたA R小隊撃滅のチャンスを掴み意気揚々と戦いを挑んだ。

圧倒的優位な状況だったし何より天候の関係で敵は増援を呼ぶどころか物資の確保すらままならない有様。

負ける要素など皆無に等しい、勝利は約束されたも同然。にも関わらず、大敗を喫したのだ。

更には裏切りの嫌疑というおまけ付きである。

新型砲のテスト前のバックアップメモリーで起動させられた影響で少なからず混乱していたゲーガーはエージェントからそう聞かされた。

「そうか。」

そう言つて視線を下へと落とした。



「で、アンタはこんな所で何してんの？」

デストロイヤーからの問いに、ゲーガーは訥々と話した。

先代の大失態に身に覚えの無い嫌疑と罵声、嘲笑。

事態を危惧したからとエージェントが護衛として付けてくれた下級人形達はしかし本当のところは自身の監視に付けたのだろうというのは薄々感じていた事。

身の潔白を、自身の有用性を証明せんと戦い続け敗北こそ無かったものの何れも戦局を左右する様な大きな戦果は挙がらず、寧ろ此方側の損害が多過ぎたせいで折角得た占領地を維持することも叶わず撤退する羽目になってばかりの事。

「何をやっているんだろ、私は。」

周囲からの風当たりは弱まるどころか益々強くなる一方の状況にゲーガーは限界を迎えつつあった。

「それで黄昏てたつて訳、、、。」

デストロイヤーはそう言つて手摺から離れるとゲーガーの手を掴んで軽く引つ張つた。

「何を」

するんだ、と言いきる前にデストロイヤーが口を開く。

「もうすぐ日が沈んじゃうし雨雲も来てるつて連絡が来たからさ、こんな所に居ないで

部屋に帰りましょ。」

そう言つて手を引つ張るデストロイヤーに戸惑いの表情を浮かべるゲイガーは、ただ大人しく付いて行く他なかった。

それが彼女との出会いだつた。

ウイリアム アッカーソン

作戦区域上空

ウイリアムはUH-60を操縦しながら30分ほど前の事を思い出していた、ブルト共々司令室に呼び出され何事かと出頭してみれば司令官からブルトとSuper SASSを鉄拳作戦区域まで運び、現地で交戦中の敵ハイエンドモデルを鹵獲せよと命令を受けた事。

「作戦に関しては受けますが、何故ブルーを？」

ウイリアムのそんな疑問に、司令官は淀みなく答えた。

「先程登録されたその機体、電脳ではなく本体側に搭載されたシステムから発信されているIFFを確認させたところ、まだ鉄血に対して有効だという事が分かった。」

司令官は椅子から立ち上がり、ブルトに近寄つて行くと彼女の肩に手を乗せる。

ブルーは一瞬ビクツと身体を震わせ司令官を見やったが、司令官はそれ以降何もなかった。彼女は不思議そうに司令官を見つめるだけだった。

「それを利用して奴に接近して取り抑えさせる、後はゲパードがI. O. P. から受領した試作品を使ってしまえばこちらの物だ。」

ブルートから手を離し、ウイリアムの前まで歩み寄った司令官はウイリアムに視線を合わせた。

「時間は無い、I F Fが無効になる前にやりたまえ。」

ウイリアムはそれに敬礼で応え、ブルートを連れて司令室から出ると早速ヘリポートへ向かい途中でSuper SASSと合流、自身の相棒であるUH-60へと乗り込み現在へと至る。

「機長、作戦区域に入りました！」

副機長の声に自身の意識を切り替え、機体の速度を落とす。

「お客さん方目標までざっと300m、これ以上は近づけない！」

高度が下がり、木に触れる寸前で静止させる。

行ってこい！という声を聞くとやSuper SASSが機体から躊躇なく飛び降り、木々の幹を蹴りつけて衝撃を殺して着地するや即座にライフルを周囲へ向け、クリアリングが完了すると機上にいるブルーに合図を送る。

「ブルー！」

ウイリアムの声にブルーが振り返る。

「無理はするなよ！ヤバイと思ったらSASSとゲパードにカバーしてもらえ！」

ブルーは頷くと機体から飛び出し、Super SASSと同じ方法で着地すると合流はせず距離を開けて走り出した。

## 人形 追憶 3

ゲパードM1

走る、走る、走る。

人工心臓が早鐘を打つのを感じる。

今日という日に感謝を。

今日この日まで、頑張り続けたワタシへの神様からの飛びっきりの贈り物。

思い出す。

最初の起動、視界を埋め尽くすくく無数の error と警告ダイアログ

「お目覚めかい、ああ無理に起きなくていい。」

白衣を着た痩せぎすの男性、主任と名乗った男からの説明。

I. O. P. の人形を専門に狙う盗賊が待機状態のワタシを運んでいた輸送車を強奪し、得意先の幹部にボディガード兼性処理人形に改造して売り捌こうとして、改造の過程でどうにも致命的な失敗をしたと。

そのせいでシステムが滅茶苦茶になり、あらゆる干渉を受け付けなくなったワタシを処分するかどうかで紛糾していた盗賊の拠点へ踏み込んだ主任の同志達によって回収

されたのだという。

「我々は君をある程度修復する事は出来たが、完全には無理だった。」

主任が言うには、ワタシが外部からの制御を受け付けない状態にあるのをどうにかしようとしたそうだけど、治るどころか逆にワタシのシステムは主任達に抵抗して受信機能のほぼ全てと感情素子に味覚や痛覚のいくつかを自律行動用の思考リソースへと注ぎ込み、ワタシが独自の判断で行動できるように<<進化>>させたそうだ。

ただ感情素子からリソースを割いた影響で他人の気持ちを知識として理解する事はできても自身の感情素子はソレを<<感じる>>事は出来ないだろうと、それを伝えることも絶望的だと言われた。(痛覚の鈍化、味覚に関しても同様で、味を感じなくなっている)

「今の君は期せずして誰からも縛られない、言うなれば自由を得た訳だが。」

主任は その上で君に頼みたい事がある と言った。

ワタシはその<<頼み>>を聞き入れ、彼等の同志となった。

自由など、どの道ワタシの機体をメンテナンスできるのはI. O. P. しかない時点でそんなモノあつて無いも同然。

そうしてただ与えられる任務と頼み事をこなすだけの毎日作業が続く筈だった。

それを、あの子が崩した。

「どうしよう、全然治らないよ。」

あの子を見た瞬間、何の前触れも無く内から溢れた想感情いが自身を蝕んでいく。

「ああ、。。。」

足が止まる。

「やっと、。。。」

俯いていた顔を上げる。

視線の先、Super SASSと連絡にあつた鹵獲機相手に大立ち回りを演じる鉄血のハイエンドモデルを遂に捉え。

「みつけた、。。。」

互いの視線が交差した。

## 人形 追憶 4

ゲーガー

「追撃が止んだ、？」

小さくとも少しずつ累積する機体の損傷とエネルギーの消費具合から限界が近づきつつあったゲーガーは、先程まで自身を襲っていたグリフィンの愛玩人形どもが唐突に姿を眩ませた事に訝しんだ。

「振り切れた、何て都合のいい話ではあるまい、。」

実際銃撃音で分からなかったが、ヘリのローター音が聞こえているところを考えると敵に増援が来たとみて間違いない。

「まずい、な、。」

電子メールの一件から新型砲製造工場に敵が来ると踏んでエージェントから付けられていた配下と共に現地へ向かい、案の定現れたグリフィンの人形部隊との戦闘。

苦勞して撃破した敵の残党の中に居ると思われる差出人を狩り出してデストロイヤーの居場所を聞き出す筈が、残党を救出に來たと思われる部隊とかち合つて交戦。

疲弊していた私と下級人形達は碌に反撃もできず蹴散らされ、散り散りとなった。



度重なる被弾によつて機体の稼働率が落ち込み、多くのシステムが error を吐き出すだけの状態。

自らの武装に蓄えられた粒子エネルギーも枯渇寸前、刀身の形成は1秒持つかどうかで射撃兵装に至つては牽制できる程の弾薬すら無い有様。

ここに来て冷静になりつつある自身に、機体側に取り付けられた自己診断AIが自爆して仕切り直すという選択肢を提示してきた。

「っー」

それを即座に棄却、万が一そんな事をして私を誘き寄せた相手がデストロイヤーに何をするか予測がつかない。

とにかく足を動かさず、歩く、遮蔽物を最大限に利用して此処からの離脱を図る。

あの屋上での出来事以来何度もやって来ては私に話しかけて来るデストロイヤー、大方ドリーマーが私を揶揄うために嗾けて来たのだらうと初めはまともに取り合わなかった。

「もう少しだ、もう少しなんだ、！」

彼女がドリーマーとつるんでいたのは以前から知っていたし、そういった関係でアレはデストロイヤー共々私を玩具にするつもりなのではと疑っていたから。

だがデストロイヤーと触れ合うにつれ、そんなものはどうでも良くなった。

「頼む、持ってくれ私の身体っ!!」

あの子の向日葵の様な笑顔が脳裏を過ぎる。

手首に巻いた彼女の髪留めに触れる。

触れ合って数日、漸く立ち直りつつあった私に長期の潜入任務で暫く会えないと告げられた時、少し前から彼女への感謝の気持ちにと作っていたネックレスを手渡し、貰うだけじゃ悪いからと彼女から貰った物。

「帰って来たらちゃんとしたの用意するから。」

そう言って任地へと向かった彼女が、程なくグリフィンの大部隊に捕捉され交戦、損傷の為回収を要請して来たのだがその後突然信号が途絶えたとの連絡を受けた。

付近に居たアルケミス率いる部隊とドリーマーの操るドローンが駆けつけた時には、破壊された彼女の武装以外発見できず、彼女の素体がある工場にバックアップが起動したか確認を取ったがそれも無し。

彼女が何らかの理由でバックアップ起動出来ない状態にあると判断した私は、彼女を探すべく各地を転戦していたところに来たのがあの電子メールだった。

「づうっ!」

背後からの衝撃で前のめりに倒れ込む。

発砲音は無かった、自己診断AIが被弾時の衝撃から7.62mmライフル弾による狙

撃と推定、遮蔽物への即時退避を推奨する。

「こんな森の中どうやってっ!？」

自身の眼前に着弾、即座に転がって側の木の陰に隠れるが幹の反対側から聞こえる弾丸のめり込む音が止まない。

「くそっ、一気に決めにくる気か!」

くぐもった発砲音にハッキリとした発砲音が増え、それに紛れて微かに雪を踏む音を聴覚センサーが捉える、この森に積もる雪質は荒く若干硬い為、辛うじて聞く事ができた。

踏む音の間隔の速さから走って向かって来ていると確信し、背にした木に向き直って武装を構える。

「チャンスは一度きり、!。」

ブレード形成用のエネルギーは僅少、多少の被弾は覚悟してその瞬間を待つ。

眼前の樹木越しに聴こえていた発砲音が途切れる。

右か左か、狙撃の優位性を捨てて態々突っ込んで来てくれた馬鹿が出て来る瞬間を待つ。

「私の勝ちだっ、<sup>間</sup>木偶<sup>抜</sup>人形<sup>け</sup>!!」

幹の左から飛び出した人影、セーラー服にフード付きのコートを着込み、黒い長髪を靡かせたライフル持ちの人形がナイフと副武装のハンドガンを構えるのを視界に捉える。

「っ！」

ライフル人形ことSuper SASSは走る勢いを殺すのとこちらからの攻撃を回避する為に半ば屈んだような状態で目標の眼前に文字通り滑り込んだのだ、そこへゲーガーは今出せる最速で自身の武装を突き出す。

横に転がったところでブレードを薙ぐだけ、ゲーガーに飛び掛かるにしても遅過ぎる。

ゲーガーの武装に取り付けられたブレード発振器の根元から高エネルギーの刃が形成され、Super SASSの上半身を消し飛ばさんと迫った。

## 人形 追憶 5

Super SASS

ゲーガー

遭遇戦

「な、あ!？」

ゲーガーが驚愕の声を上げる。

自身の繰り出した一撃、タイミングも速度も完璧で確実に眼前の<sup>SUPER SASS</sup>ライフル人形に直撃する筈だった渾身の突きはSuper SASSが地面に背中から倒れた為に彼女の上半身があつた位置を通過する。

ゲーガーは慌てる事なく直進させていたエネルギー刃の軌道を止めそのまま下に向けて振り下ろそうとしたのだが、Super SASSが右足を勢いよく振り上げて武装の長柄<sup>ポル</sup>を蹴り上げて勢いを殺し、更に靴底で受け止めたのだ。

直後にゲーガーの網膜に警告ダイアログが立ち上がり、武装のエネルギーが枯渇した事を告げる。

エネルギー刃が消滅、最早ただの棒切れ同然となった武装にナイフを捨てたSuper SASSの右手が迫った。

「いっ!？」

ゲーガーはSuper SASSが自身の武器を掴もうとしているのを悟って逆に組み付こうと身を乗り出したが、Super SASSの左手に握られていたロングマガジンを装填したハンドガンが此方に照準を合わせているのを見るや咄嗟に前、未だ倒れたままのSuper SASSの頭上側へ飛んだ。

「ぎ あ !?」

ゲーガーの身体に発砲音が響く度、凄まじい衝撃と激痛が走る。

最初の一撃は右の脇腹に、次に腹部と左足の太腿へと直撃した弾丸<sup>50AE弾</sup>

は彼女の着込んでいた防弾衣と彼女自身の防御力の高さもあつて貫通する事は無かったが、逆にそれが仇となった。

至近距離で放たれたハンドガン最強を誇る大口径弾の衝撃力を存分に味わうこととなったゲーガーは、碌に受け身も取れず地面に激突した。

Super SASS

ゲーガーに弾を撃ち込んだ直後、Super SASSは立ち上がるやハンドガンをゲーガーのいる方向へと構える。

「、。」

驚くことにゲーガーの姿は無かった、ただ地面に転がった跡と森の奥へと向かう足跡だけが残されていた。

Super SASSは即座に追跡を開始したが直撃こそ免れたものの、至近距離で浴びたエネルギー刃の熱で生体部品に幾らかの損傷、特に右足に重度の火傷を負ってしまった為に走る事が出来ず、半ば足を引き摺るようにして足跡を辿ってゲーガーを追った。

ゲーガー

「ふっ、、、うっ、、、」

地面に投げ出された直後、ゲーガーは痛覚をカットして即座に立ち上り駆け出したが左足の太腿への被弾が祟って思うように歩けず、何度か木にぶつかったり蹴躓いたりしながらも何とか離脱しようとしていた。

「しっ、、、こいつー」

草を掻き分け、雪を踏む音が背後から近づいて来る。

解決策を導き出そうと演算を行おうとして、自己診断AIからひっきりなしに送られてくる情報が邪魔をする。

網膜を通し表示され続ける損傷率、機体を駆動させるのに必要なエネルギー残量に先程の戦闘の影響で更に増えたシステムエラー。

煩わしいそれらを纏めて遮断して進んだ先に見えた人影を見て一瞬警戒したが、それ

が鉄血の近接型人形だと分かるや声をかけた。

「おい、こつちだー！」

ブルートもゲーガーに気づいて駆け出してきた。

漸く会えた味方、目立った損傷も無いようで軽やかな足取りでやって来るブルートに勝機を見出したゲーガーは即座に作戦を組み立てる。

「グリフィンの人形が一体こつちに来る、お前に前衛をつうあ!？」

ブルートの正面、ゲーガーからは自身の背後に振り返りつつ状況を説明しようとしていきなり組み付かれ、押し倒された上に武器を取り上げられてしまう。

「何のつもりっ、離せっ!」

ブルートの腹部を蹴り付けて引き剥がしたが、ブルートはタイミングを合わせて飛び退いた為大したダメージも無く、着地するや奪った武器を後ろに放り投げ即座にゲーガー目掛けて飛びかかった。

「ちいっ!」

ゲーガーは身を捻って躲し、自身の身体があつた位置に着地したブルートの側頭部目掛けて肘打ちを打ち込む。

「つあう!?!」

側頭部への攻撃で仰け反るブルートに追撃を食らわせようとしたゲーガーだったが、



再び追いついたSuper SASSに拳を掴まれて押さえ込まれる。

「離せっ、離せえっ!!!」

ブルートとSuper SASSに組み敷かれながらも抵抗するゲイガー、そこへ新たに現れた一体の人形と目が合う。

白を基調とした服

灰銀色の長髪

スラリとした長身

その人形、ゲパードM1は笑っていた

熱病に浮かされたように頬を上気させ

蕩けた琥珀色の瞳でゲイガーを見つめていた

<sup>ゲパード</sup>人形の口が言葉を発する

み

っ

け

た

ゲイガーは言い様のない恐怖に襲われながらも確信した。  
コイツだと、この人形こそが私を誘き出した張本人だと。

何とかして自身を押しさえつける2体の人形を押し退けようと、再度力任せに暴れようとしたゲージャーだったが、自身の側に歩み寄ってきたゲパードがポーチから取り出した無針型の注射器を首に打ち込まれた瞬間大きく仰け反り、程なく脱力して動かなくなつた。

# 鹵獲 侵食 帰投

ゲパードM1

「やつと会えた、。」

注射器をゲーガーに打ち込んだ後、ゲパードは地面に身を横たえた彼女の頬にそっと触れた。

これまでの戦闘で傷つき、泥や血に塗れた身体を優しく抱え上げる。

「心配しないで、もう大丈夫だから。」

身体を動かすことができず、困惑と恐怖に敵意を滲ませた瞳で睨み付けてくるゲーガーに静かに語りかけながら歩き出す。

「Super SASSから司令部へ、ターゲット目標を確保しました。」

ゲパードの側に立つSuper SASSは無線で作戦の成功を伝え、ブルートに支えられながら後に続く。

『了解、そのまま真っ直ぐ進んだ先に空き地がある、そこでへりに乗って帰還してください。』

司令部からの指示に従って空き地を目指すゲパード一行、その周囲をゲーガーを追い

込んでいた回収部隊の人形達が固める。

その後特にトラブルも無く目的地に辿り着き、上空で待機していたmurder b  
arrredが回収の為彼女達の側に着陸する。

「回収部隊の御嬢さん方はどうすんだ！」

ウイリアムは着陸して直ぐ操縦席の窓を開け、走り寄ってきた回収部隊の隊長であろ  
う戦術人形とゲーガーの武装を担いでいるサブマシンガン装備の人形に喧しいロー  
ター音にかき消されないよう大声で呼びかけた。

「私達はこれから車両部隊と合流しますので問題ありませんわ！」

そんなやり取りをしている間にサブマシンガン装備の人形が鹵獲した武装を機体に  
乗せ、ゲパード達は素早くへりに乗り込みブルートがウイリアムの肩を軽く叩いた。

「マスター！全員乗りましたよ！」

ブルートにそう言われるや回収部隊の戦術人形に離れる様合図を送り、十分離れたの  
を確認してへりを離陸させた。

ゲーガー

(何故だ、体が、くそ、、、っ！)

ゲーガーは混乱していた、ゲパードに注射器を打ち込まれてから全く身動きが取れな

くなってしまったのだ。

どうにかしなければならぬのに体に力は入らず、焦りと僅かな恐怖ばかりが募るばかり。

そうしてとうとうへりに乗せられ、床に置かれた担架に寝かされたと思つたらゲパードによつてすぐに上体を起こされ抱きすくめられた。

「招待状、ちゃんと見てくれたんだね。」

頬に手を添えられ、ゲパードと顔が向き合う。

上気した顔に僅かに潤んだ琥珀色の瞳がゲパードを暫し見つめ、やがて彼女の耳元へ顔を近づけた。

「落ち着いたら、一緒にあの子に会いに行こう?」

そう耳元で囁かれたゲパードは射殺さんばかりにゲパードを睨むが、再び向き合ったゲパードは彼女に薄く微笑むだけだった。

基地までまだかかるから　　と言つてゲパードはコードを取り出して自身の首の

端子に接続し、もう一方をゲパードの首の端子に取り付ける。

(あの子と私の出会い。)

ゲーガーの頭の中にゲパードの声が響く。

(全部、、、)

ゲーガーの内から、ナニカが染み込んでくる。

(あ、ぐあ、、、)

思考が漂白し、視界が黒く染まっっていく。

(見せてあげる。)

ゲパードの声が聞こえてすぐ、ゲーガーの意識は闇に呑み込まれた。

Super SASS

ブルートに助けられながらへりに乗り込み、ゲーガーの寝かされた担架の横にもう一つ用意された担架を勧められたが、謝辞して座席に座り込む。

「うう、、、」

断られたブルートが目の前でシヨボくれる様に胸の内にチクリとした痛みを感じ、それを誤魔化す様にデザートイーグルと自身の半身からマガジン<sup>Super SASS</sup>を抜き取ってライフルのチャンバーを引いて装填された弾丸を取り出し、デザートイーグルに新しいマガジンを装填して安全装置を掛ける。

「、、、」

ライフフル弾をマガジンに押し込んでマガジンポーチに仕舞い込み、項垂れたままのブルートを見つめ、頭を撫で付けた。

「うにゅ？」

初めは戸惑っていたブルートの表情が少しずつ緩むのを見て、撫で付けていた手を離して背もたれにもたれかかる。

Super SASSは自身の口元も、少し緩んでいる様な気がした。

## 帰投 受け入れ

アヴァロン城塞 作戦司令部

「murder bird 作戦空域を離脱、当基地到達まで1時間32分。」

オペレーターからの報告が入るや、司令官は自身の側に控えている主任に視線を向け、口を開いた。

「主任、第1から第8班を率いてハイエンドモデルの解析準備にかかれ。」

主任は司令官からの命令を聞き、手元の端末に素早く召集命令を打ち込んで送信するや足早に部屋から出て行くのを見届けた司令官は、椅子から立ち上がって指令室中央でコンソールを操作するオペレーターの1人に近寄る。

「オーダー35と44を実行中の第2部隊に繋いでくれ。」

「了解しました。」

司令官の言葉を聞いたオペレーターはそう言うと言った手元のコンソールを操作し、自らが担当する部隊に通信を繋げた。

某地区 第2部隊



『アヴァロンコントロールより第2部隊各位、現在の状況は？』

無線機からのコールを確認し、即座に接続するや司令官の声が響く。

「こちら第2部隊P Z B 39、作戦は極めて順調よ司令官殿。」

第2部隊狙撃要員のP Z B 39はそう答えつつ、自身の獲物である対物ライフルを背負い直してサイドアームステアミミ1912を腰のホルスターから抜き取り、少し前に部隊の前衛を担当するG 36 Cが連れ去って来た目標、人権団体幹部の1人である男に照準を合わせる。

手足を縛られ猿轡を口に付けられた男は喚こうとしているのか、はたまた命乞いでもしようと言うのかモゴモゴと口を動かしているが既にこの男が持っていた情報は、回収地点に向かっている間に全て絞り出している以上何の価値も無い。

「Auf Wiedersehen Bokku、次は真人間になつて産まれてきなさいな。」

一層もがき始めた男の頭に向けて発砲、更に胴体に三発撃ち込んだ後ポケットから前もつて入手していた包み紙を取り出して男の遺体から少し離れた所に放り投げた。

銃剣に斧が交差した絵が描かれているソレ、男の所属する組織と潜在的に敵対関係にある組織が要人等を処刑する前に必ず使う気付け薬という名の麻薬が入っている包み

紙を男を取り返そうとこちらに向かっているだろう血の気が多いだけの頭の悪い跳ねっ返り連中が見つけ、報復を声高に叫ぶ様とそこから引き起こされるだろう血で血を洗う争いが容易に想像でき、愉快で仕方ないとばかり口元が少しだけ緩む。

「さて、帰りましょうか。」

「P Z B 3 9 はサイドアームをポーチに仕舞い、周囲を警戒していた部隊員だとともに回収地点へと歩き出した。」

## 過去 顛末 1

murder bird機内 ゲーガー

作戦区域からアヴァロンへ向かうヘリの中、ゲーガーはゲパードM1によってあの日、デストロイヤーに何があったのかを見せられていた。

ゲパードの主観からであろう景色、廃棄された都市の中を歩く彼女は突如響いてきた怒鳴り声に導かれ、かつてこの都市の住人達の憩いの場であったであろう草木が伸び放題の公園へと辿り着いた。

「ふざけんじゃないわよ!」

木の陰から覗き込むゲパードM1の視線の先、空中を漂うドローンに怒鳴りつける少女の後ろ姿。

(デストロイヤー!)

ゲーガーがデストロイヤーを認識した瞬間、映像にノイズが走り、ゲパードの視界一杯に警告ダイアログが立ち上がる。

(な、にが、一体、どうなって、。。)

「もういい!こうなったら自爆!いいのかしらあ?安易に自爆なんてしちゃって。」っ!」

ゲパードに何らかの異常が起こり、ゲーガーは揺らぐ視界の中で混乱しながらもデストロイヤーの通信相手の声をハッキリと聞いた。

「端末操作に四苦八苦してあの”出来損ない”と宜しくやる時間が少なくなっちゃうから助けてって泣きついてきたあなたの”バックアップを含めた全部”を代わりにしてあげてたのは誰かしらねえ？」

「あんた、まさか、！」

何故？

「そういうわけだから、頑張んなさいな。」

何故だ、。。。

(ドリー、マー、!?)

ゲパードが歩き出す

「ああそうそう。」

自らの口に取り出した錠剤を含む

「デストロイヤー。」

音も立てずに近寄り

「何よ、。。？」

ゲパードの手が伸びる

「こわあいお姉さんには気をつけなさいよ?」

「…、は?」

デストロイヤーの肩を掴んで

「なっ!?!」

強引に振り向かせて

「あんた、ムグウっ!?!」

デストロイヤーの唇に自身の唇を重ねる

「っ、むううー!?!っ!?!」

目を白黒させ暴れるデストロイヤーを抱き締めて拘束し、重ねた唇を自身の舌でこじ開けて錠剤を喉奥へと押し込んで強引に飲ませる。

「っは、あ。」

デストロイヤーの体がゲパードに寄りかかり、崩折れる。

「あら、中々にお熱いことですね。」

ドリーマーの操るドローンなど気にする素振りすら見せず、倒れゆくデストロイヤーの体を支え、ゆっくりと地面へと横たえる。

「な　　ん　　。」

ゲパードは端末を取り出し、力なく横たわるデストロイヤーの首にある接続端子を見

つけ、端末から伸びるコードを差し込む。

「あ　え　あ　？」

暫くしてコードを抜き取ると、デストロイヤーの体を抱え上げる。

「残念ゲームオーバー♪さようなら、私の可愛い人形ちゃん。」

ゲパードはドローンから背を向けて歩き出し、そこで映像は途切れた。

## ある一日

アヴァロン城塞ヘリポート

Super SASS

鉄拳作戦が終了して3日後、本来の予定ならば未だポツドの中で取り替えられたばかりの下半身の骨格フレームに生体部品を少しずつ馴染ませつつ細かなチェック中であるはずだった彼女は、突如ポツド内を満たした濃密でドロドロとした灰褐色の液体（人形の生体部品を高速で培養し、フレームに瞬時に馴染ませる為の医療用ナノマシンの塊）によつて瞬く間に全快となつてポツドから出されると、珍しく焦った様な雰囲気を滲ませる主任からSuper SASSにとある戦術人形の救出作戦支援と現地で勢力圏を拡大しつつある鉄血人形の殲滅を行う作戦が通達され、彼女は受諾するや必要な装備一式を纏つてヘリポートへ向かい、自らを迎えに来るヘリを待つていた。

「……」

装具を入念にチェックし、コートの裏にあるマガジンポーチに予備弾倉を差し込んで行きつつ今回支援する部隊と作戦地区についてのデータを電脳内でポップする等、ヘリの到着までの間に準備を整える。

今回の作戦はアヴァロン城塞の補給路に程近い場所まで出張ってきた鉄血を排除する事がアヴァロン側にとつては主目的となるが、同時に囚われた2人の戦術人形を救出する事も忘れてはならない、非常に重要な作戦である。

主任はそう言つてはいたが、Super SASSには主任的にはどちらかと言うと囚われた2人の戦術人形の救出を優先して欲しいと言わんばかりの雰囲気醸し出していた様に見えるが、それ以上深くは考えなかつた。

自分は戦術人形で、そういった他者の迷惑については考える必要は無い。

只々言われた事をやればいいのか、そうすれば指揮官や主任達の計画は進み、やがては全人類を救うのだ、その為に私は生まれ変わったのだから。

〈間もなく6番ポートにヘリが着陸します、給油車及びポート作業員は配置についてください〉

管制塔からの場外アナウンスが流れるや空気を叩く音が聞こえ、次第に大きくなっていき、本社からの迎えのヘリが誘導員の指示の下ポートへと滑らかに着陸する。

降り立つたヘリへと作業員達が群がり、給油車からホースを伸ばしてヘリへと接続を行おうもいれば、機体のチェックを行う者として忙しくなっていく。

Super SASSは暫しその風景を眺め、作業員達が各々の役目を終えて離れていくのを確認すると立ち上がり、自身の装備を持ってヘリへと向かつて歩き出した。



「君がお客さんだね！さあ乗って！」

へりのドアが開き、中に居たクルーがへりに近づいてきたSuper SASSに大声で叫んだ。

「はい、道中お世話になります。」

へりのローター音の中で、声はあまり大きなものではなかったがSuper SASSの声は不思議と良く通り、クルーにもしつかり届いた様で、口元を綻ばせるとSuper SASSを招き入れ、ドアを閉めた。

Super SASSが座席に座って直ぐ、へりはフワリと浮かび上がり、目的地へと飛び立った。

## F 0 5

F 0 5 地区 廃ビル屋上 Super SASS マーダー離脱後

今回の作戦で協同する事になったDG小隊へマーダーからの伝言を伝えてすぐ、ライフルを照準、発砲。

爆撃で崩壊したビルの残骸に隠れていたヴェスピド、イエーガーが盾にしていた壁ごと纏めて撃ち抜く。

「排除。」

盾にしているビルの壁ではこちらの徹甲弾に対して脆すぎる事に気づいて飛び出して来たリッパの脳天を撃ち抜き弾倉交換、せずにサイドアームを引き抜き背後の屋上出入り口側に照準、ドアをぶち破って出て来たブルートの胴体と頭に50AE弾を撃ち込んで撃破、改めてライフルの弾倉を交換、チャージングハンドルを引きひたすら現れる鉄血人形に照準して撃ち抜いていく。

「敵戦力、低下、、、残弾、問題無し。」

とある計画の為に改造された結果、大幅に削られた自身の残り少ない感情モジュールに割かれていたリソースを戦闘に必要な演算に注ぎ込んだ事で能面のような表情で敵

を葬る様はある種不気味ではあったが、今は直近に協同部隊は居ない。

初めての顔合わせの時には不審に思われぬように”少々感情モジュールにリソースを割いていた”が、その必要は今はない以上無駄な事に演算を割く気など更々無いのでさっさと戦闘モードへ移行、廃ビルの屋上という目立つ場所から派手に暴れる事を引き付ける作戦に出たのだが。

「クリア。」

どうやら集まって来ていた敵を粗掃討してしまつたらしい。

とはいえ完全に制圧した訳では無い、慎重に周囲を確認して行く。

実際つい先程、DG小隊に伝言を伝える前に仕留めたイエーガーが被弾直前に放った粒子ビームライフルを腹部に直撃してしまふ事があつたのだ。

光学兵器の為出血こそ無かつたものの、簡易の修復キットで応急処置を早々に済ませて包帯で傷口を巻いただけの状態、これ以上の被弾は色々と不味い事になるので慎重に動かねばならない。

ライフルを手に立ち上がり、次のポイントへ向けて移動を開始した。

アヴァロン城塞 研究室 主任

Super SASSから送られてくる戦闘データを端末で受信し、閲覧している瘦

せぎすの男、主任は複雑な表情でデータを見つめていた。

「ゲーガーとの戦闘でシステムの最適化は粗方できていたが、まだまだ改善すべき事はある、か。」

純粋な狙撃ではほぼ完璧の域にあるが反撃された場合の回避動作が若干遅い、とメモに書き留めて暫し思考の海に沈む。

「射撃管制の最適化が完了次第回避を重点的に訓練のスケジュールを、いや試作中の大容量ソフトと交換して演算モジュールの大型化を、。」

あらゆる案が頭の中に組み立てられていく。

今回の作戦で彼女をより高次の存在へと押し上げる為に必要なモノがどんどん増えていくのが嬉しくもあるが、兎にも角にもすべては彼女が無事に帰還しなければ意味が無い。

今は彼女が帰還する事を祈りつつ、今度は組み立てられた案の実証実験に必要な設備を手配するべく室内電話を手を取った。

# 作戦終了

super SASS

F05地区より離脱

屋上から離脱後、幾度か戦闘を行っていたところで全ての救出対象を確保した旨の通信を受け取り、迎いのへりに乗り込んだのが1時間程前の事。

へりに乗り込んでいたクルーの補助の元修理用キットを使って損傷箇所の修理を行い城塞へと帰還、へりポットに来ていた司令官に報告を済ませた後、ストレッチャーに乗せられ研究棟へ運ばれメンテナンスポッドへと入った。

主任 研究棟内の自室

「作戦成功、と言ったところだが、。」

今作戦のsuper SASSの戦闘データを精査する傍ら、救出対象の一体が鉄血によって何かしらの細工をされたとの報告を聞き、暫く考え込んでいたが自分如きではどうにもなるまいと結論付けると現在の解析作業へと意識を集中させる事にした。

司令官 城塞指令室

作戦完了の旨を聞き届けた後、指令室へと戻った司令官はペルシカ博士と彼女の人形への見舞い件礼の品（高級珈琲豆とジャックダニエル、その他いくつかの趣向品）を手

配し、16 Laboへ発送の手続きを済ませると目前の人形、ゲパードM1へと向き直った。

「色々とゴタついたが、こうしてゲーガーの件について漸く落ち着いて”内密”に話ができるようにしたわけだ、聞かせてくれるかね、その話の内容を。」

ゲパードM1

ヘリが城塞に到着する前から、彼女は鉄拳作戦とゲーガー鹵獲の報告を利用してデストロイヤーの件について話す事を考えていた。

この城塞を預かる司令官に、いずれ捕獲したデストロイヤーの事が露見するのは時間の問題、ならばいつそゲーガー鹵獲とこれまで従事した作戦の功績において辞退していた成功報酬としてデストロイヤーの身柄を、あわよくばゲーガーも手に入れんとこの場を設け、全てを告白しようとしたのだが。

「ああ、”デストロイヤーの件に関してなら何も問題は無い”、あのタイプの機体は鹵獲事例が多い故データも十二分に揃っている、君の好きにするといい。」

ゲパードM1に関して、粒子兵器の出力と制御機能が解析されれば用は無い、君さえ良ければゲーガーも預けるが？と言葉を返す司令官に、ゲパードM1ははじめその言葉が理解できなかった。

「どう、して、？」

まだ話してすらいのないのにその事を？と続ける前に司令官が口を開いた。

「それは、君がああ暗殺任務を終了した後、デストロイヤーを鹵獲するように誘導したのは我々、正確にはこの”城塞にあるAI”がそうしたからさ。」

ゲパードは忘我した、デストロイヤーの鹵獲は誘導されていた？

城塞のAIが？

何故

どうして

「我々はこの城塞が落札されて間もない頃、城塞地下を拡張工事中、偶然発見された超古代文明の遺産、巨大な人工知能を修理し解析した後城塞に配備された全ての戦術人形の演算補助を含むあらゆる面でのサポートに利用している。」

椅子から立ち上がった司令官は呆然とするゲパードに歩み寄るとそう話し、彼女の肩に手を置いた。

「あのAIは好奇心が強くてね、君が任務を終えて帰還する直前にあの地区にデストロイヤーが潜伏しているを感知した後、独断で君を遠隔誘導して捕獲させたのさ。」

司令官は一旦ゲパードから離れ、指令室の窓辺へと向かい外を眺めながら言葉を続ける。

「我々も当初は驚いた、主任からの進言でとりあえず観察するに留める事にしたのだが、AIはデストロイヤー、正確には鉄血の使うオガスプロトコルを含む”何か”に興味があつたようで、彼女を中継機に代用して驚異的な速度で膨大な量の情報の収集と解析を行おうとしたのだが。」

デストロイヤーの電腦がその過程で負荷に耐えられず破損したと話し、一旦言葉を切った。

「もうAIもデストロイヤーへの関心は低い、ゲージャーに関してはデストロイヤーの一件で相当慎重に解析させている故、まだ時間がかかるようだが、。」

ゲパードはただ黙って話を聞いているのを見やり、俯く彼女に今一度近寄ると今度は彼女の首にある接続端子に司令官が自身の袖口から引つ張り出したコードを差し込んだ。

「っあ、何、を!？」

端子から電腦に流れ込んで来た強烈な電気信号に驚いたゲパードではあつたが、自身の身体がピクリとも動かなくなっている事に気付いて困惑する。

「どうやら君にはこの事実を話すのは早すぎたようだ、だからこの件に関しては忘れて貰う。」

司令官がコードを引き抜き、指令室の椅子に座る。



「代わりに……」君にとって最も都合の良い話をした事にさせて貰うよ。」  
その言葉を最後に、ゲパードの意識は闇の中へと引きずり込まれた。

# 新型戦術人形

## テスト

S O 5 地区近郊      テロリスト拠点

その日 S u p e r      S A S S はアヴァロンに配属された最新型戦術人形の実戦テストに支援として参加、アヴァロンから遠く離れた山岳地帯にある遺跡に巣食うテロリスト集団の掃討にあたっていた。

S u p e r      S A S S

「司令部、配置に着きました。」

豪雨の中、生い茂る木々や険しい斜面を縫うように移動し、河岸の林に身を潜めると荒れ狂う大河を挟んで向こう岸、川沿いの崖をくり抜いて作られた建造物。

目標の根城たる遺跡と入り口に立つ歩哨 3 人を確認して作戦本部へと通信を入れる。

《了解、待機せよ。》

本部からの返信を聴きつつ自身のライフルを構え、地面に伏せる。

今回の主役たる新型機のリポートに徹する事に集中するべくシステムを戦闘モードへと切り替えていった。

## 同時刻 遺跡入り口

豪雨の中歩哨として立たされている3人のテロリスト達の気分は最悪だった。

滝の様に降り注ぐ雨に吹き荒れる風、この遺跡の目前に沿って流れる大河の濁流が小規模な波となって時折自分達で築いた遺跡入り口前の広場の護岸を飛び越えて降り掛かってくるのだから堪らない。

「ああクソ、寒いつたらありやしない！」

見張りの1人が思わず愚痴をこぼしたが、他の2人には地面を打ち据える雨音で聞こえなかったらしい。

普段なら割と簡単な仕事で、実際対岸と遺跡から出てすぐ右にある車一台分が通れる程度の緩やかな坂道に気を配るだけで良いのだがこうなると川の水にも気をつけなければならぬ。

護岸しているとはいえ柵など無いのだ、飛び越えて来る波に足を取られ流されればタダでは済まないのだから。

雨のせいで煙草も吹かせられずイライラとしながら一緒に立たされている憐れな同僚2人に声を掛けようとした瞬間、文字通り脳天から凄まじい衝撃を受けて男の意識は途絶えた。

彼女にとって今日は初めての实战、緊張してはいたがシユチュエーションは最高といっても過言ではなかった。

豪雨のおかげで視界は狭く、生い茂る木々故に隠れ場所には事欠かない。

遺跡入り口以外の外周部を巡回する見張りに悟られる事なく入り口直上に辿り着くや丈夫な木の幹にロープを巻きつけ、自身の銃のスリングを調整して背中回し、ずり落ちない様にしっかりと固定、腰のベルトに付いているカラビナにロープを通す、最後にロープの先端が自分より先に下へ落ちない様に巻いて左手でしっかりと握るとゆつくり崖を伝って降りながら見張りの装備を観察する。

直下の男はベースボールキャップにポンチョ姿で、ポンチョにアーマー特有の角張ったりこんもりとした膨らみが見られずそもそも着ていないかSPが身につけている様なプレートだけを仕込んだ簡易型だろうとあたりをつける、手にはMP5を持っているのを確認し視線を隣の歩哨にずらす。

隣の歩哨も軽装らしいところは最初の歩哨と同じだがソードオフショットガンを手にしていて、ショットガンを見た時最初に排除すべきかと思案したが丁度肩に掛けようとスリングを手繰っているとところを見るや彼女の中での脅威度は最下位になった。

最後の1人は手に持ったアサルトライフル、M4に掛かった泥水を手持ちのタオルで拭っていた。

(ホント、怖いくらいに”ツキ”が来てる。)

対岸のSuper SASSに近接で仕留める旨を通信で伝えもう一度周囲を確認し、すぐ側の崖の窪みにあつた大きな石を見つけて手に取ると自身を留めるロープをカラビナから器用に外す。

J S 9はショットガン持ちが銃を肩に掛け、ポケットの中から何かを取り出そうとポンチヨの中に両手を潜り込ませ、M 4を持った歩哨は銃本体部分にこびり付いて中々落ちない汚れを本格的に落とそうと暴発しないように銃のセレクターをセーフティへ変えた瞬間ロープから手を離して急降下。

真下に居たM P 5持ちの脳天に手に取っていた人間の頭程ある石で思い切り殴り付けた。

落下の速度と真上から振り下ろされた石、自身の重量からくる強烈な一撃で頭蓋の碎ける感触を感じながら倒れ行く歩哨の体をクッション代わりにして着地、しゃがんだ状態のまま即座に隣にいたショットガン持ちの両脚を外骨格の付いた左足の蹴りで刈り上げて倒す。

外骨格の力も合わさってショットガン持ちの体はその場でバク転でもしたかの様に宙返りし、頭から地面に叩きつけられて沈黙した。

最後のM 4持ちはいきなりの事に理解が追いつかず、呆けた顔でこちらを見ている間

に飛び掛かり、素早く口を片手で掴んで塞ぎ、M4持ちの足を自身の足で引つ掛けて地面に叩きつける様に押し倒す。

ことここに至りて漸く今の状況を理解して暴れようとするが時すでに遅く、JS9は素早くもう片方の手で抜いたナイフを首に突き込み傷口を抉りあげる。

M4持ちが白目を剥いて事切れるのを確認して手を離し、ショットガン持ちを見る。

生きていたようだが少し呻いているだけで起き上がる気配はなかった。

JS9は昏倒したショットガン持ちから視線を外し、死体二つから装備を確認、手榴弾を取れるだけ確保し持参したポーチにしまい込むと、素早く死体を濁流に投げ込み、ショットガン持ちの襟首を掴んで入り口から見えない場所まで引き摺ると仰向けに寝かせ、馬乗りになった。

Super SASS

ライフルを構え、JS9が敵と交戦に入った瞬間いつでも撃てる様に引き金を軽く引き、スコープ越しに彼女の戦いを見ていた。

彼女が敵を全て素早く仕留めるのを確認すると照準を入りに口に向ける。

「入り口に敵の気配無し、クリアです。」

JS9からの了解と言う返事を聴きながら入り口以外にも照準を向けるが特に異常は無く、再び照準をJS9の側の入り口付近に戻す頃には彼女は十分な情報を得たのだ

ろう。

スコープ越しに見えるJ S 9は虫の息の歩哨に微笑みかけると両手を歩哨の頭部に添え、即座にへし折り肩に掛けていたショットガンを手に持つと死体を担いで川へ持つて行き、濁流の中へと放り投げるや遺跡の入り口へと入って行った。

それから1時間としないうちに遺跡は大爆発を起こし、その区域から一機のへりが2人の少女を回収して悠然と飛び去っていった。

アヴァロンに正式に配属されたJ S 9は、基本的に単独で各S地区を回る事になる。与えられた任務は遊撃、諜報、破壊工作と様々であったが、嬉々として戦地へと赴き常に優秀な戦果を挙げ続ける事になる。

## 救出作戦 前段階

S 地区某所      テロリスト拠点内

J S 9

「ふっふっ大量大量。」

アヴァロンにて補給と整備の後に正式に配属が決まって直ぐ、彼女は単独での長期破壊活動を言い渡され、従事する傍ら鉄血製戦術人形を好んで捕獲する人権団体の噂を聞きつけ、それ程時間を掛ける事なく拠点を発見。

夜間に忍び込んだんむや楽しいスニーキングミッションを心行くまで楽しみ、施設全てを掌握すると倉庫や武器庫を漁って目当ての品を入手していた。

「前の拠点で拝借した40mmと交換性があって良かった。」

自身の愛銃とは別の、数日前に相対した軍人崩れのゴロツキを始末した際に手に入れたM320グレネードランチャーに装填して調子を確かめつつ自身の傍らで頭をトマホークでカチ割られ倒れ伏す作業着を着た男、この基地の生き残りが自分しか居ないと悟や、見るに耐えない醜い命乞いをしてきた故即座に始末した”対鉄血用擲弾の開発責任者”だったモノに視線を向けニッコリと微笑んだ。



「この弾はこれから私の会社が有効に使わせていただきますので、ゆつくりと休んで下さいな。」

そうして遺体から視線を外し、この基地の中枢たる司令室へと足を運んでいく。

「この兵器の設計図をアヴァロンと本社に転送して、後は、、。」

残った予定を組み立てつつ、されど常に周囲への警戒を怠る事なく辿り着いた司令室内を一瞥し、彼女は部屋の片隅に置かれた妙な装置を視界に捉えるとそれが何なのかを調べる為に近寄って、感嘆のため息を溢した。

「一体どうやってこんなの手に入れたのやら。」

球体状の物体、よく見ると鉄血製の電脳を中心に複数のコードが接続され。

周囲を複数のコンソールが囲んでいる（JS9的には）中々に愉快的なオブジェを見やり、改めて周囲を確認する。

「これで彼奴らの位置情報とか作戦内容を傍受してたつて訳、ね。」

爆破する前に気づけて良かったと溢しながらも、この部屋に最初侵入した時に人間の生態反応を探知するのに集中し過ぎてコレの事をスルーしてしまった数分前の自分の失敗を反省しつつ、なんの気なしにコンソールを操作して傍受した内容を確認している。

「これは、、相当まずい事になってるみたいね。」

装置の画面に出力されていく文字を見る。

どうやら此処からそれ程遠くない地区にてコレクターなるハイエンドがかつてS u p e r S A S S と共闘した部隊の隊員を捕獲した事と。

周辺に展開する下級人形、特に盾持ちに召集をかけている事や、集合次第現地改造された盾に換装する旨の内容がつつらと垂れ流されていく。

どう見てもそのコレクターとやらが何やら相当悪い事を企んでいるのを悟った彼女は、すぐさま基地の通信設備に取り付くとこの位置をアヴァロンに知らせ、持てるだけ装備を引つ詰めると基地の車両区画に向かいバイクを拝借して拠点から飛び出して行った。

## 救出作戦 成功

救出作戦終了後

J S 9

コレクターを倒し妨害弾を数発バレット達に渡した彼女は挨拶もそこそこに一人荒野を作戦直前に制圧したテロリスト基地から拝借したバイクで走っていた。

「作戦大成功！妨害弾のテストもできたし、良い戦闘データも手に入ったしで本当にラッキーだった。」

そう呟きつつも、バイクを巧に操って回収地点へと向かう。

コレクターを撃破し作戦は成功したとはいえ、彼女自身無傷というわけではなかった。

修理するにしても自身の身体は量産型ではなく、極少数生産されたテストモデルであり、その中でも特に製造精度の良好な機体であるのもあって非常にコストが高く、予備部品はJ S 9自体の本格的な量産予定も未定とあって細々としか生産されていない。

協同先に修復設備を使用させてもらうのも気が引けたのもあって城塞へ連絡を取り、

偶々近くで新型のフィールドテストを済ませて帰還中のヘリが通過中という話しを聞くと、ピックアップしてもらおう事を決め、他のメンバーへ挨拶をすませると回収予定地点へ向けてそそくさと飛び出した。

「もう少しで回収地点だけど、ちよつと早かったですかね。」

自身の向かう回収地点を視界に収め、ヘリが見当たらないのを確認すると近くにバイクを止め、徒歩で武器を片手に保持して周囲をクリアリングしつつヘリを待つ。

5分もしない内に自身の通信機能にシグナルが届くや即座に接続。

《ゴブリン、こちらバルター3-4、間もなく北東より回収地点上空に入る。》

ゴブリン、自身の作戦時におけるコールサインが呼ばれ了解と返信した直後に上空を一機のUH-60がフライパスし、周囲をぐるりと一周すると緩やかに高度を落として着陸する。

JSS9は着陸したヘリに素早く乗り込むと、ヘリは即座に離陸を開始していく。

「あれ、、、？」

JSS9は座席に座って直ぐにこのヘリに乗り込んでいるだろう新型とやらを見ようとして違和感を感じた。

(居ない? いや、、、)

乗り込んで居たのは少し前に協同したSuper SASS、ハンドガンのP7にサ

ブマシンガンのマイクロウジとアサルトライフルのAK47とG3。

不審に思いながらもSuper SASSを除いて残りを注意深く観察し、JS9は直ぐに違和感の原因に気付いた。

自分達に使われている生体部品とは違う人工物然とした蒼白の肌にまるで生気を感じないガラス玉の様な瞳、極め付けにどの子も破損しているのだが人工血液が流出している様子も無い上に、彼女達の表情には苦痛の色すらない。

(この子達、例の計画のテストモデル、新型ってそういう。)

JS9は即座に悟った、彼女達はかつてアヴァロン城塞とI.O.P.が計画し、試験生産した簡易量産型戦術人形。

鉄拳作戦に於いて主力を務め、ダミー人形以下のローエンドモデルによる高価値目標に対する物量による正面攻勢を行った場合に被る損害率の確認、施設破壊の達成率の評価を最後に計画は中断と聞いていたのだが。

(再開と見るべきか、それとも、。)

JS9は1人物思いに耽りながら、眼下に見えてきたアヴァロン城塞をじつとみつめていた。